
異界とあとえーっと・・・～大いなる魂の器～

疾風怒濤

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異界とあとえーつと・・・大いなる魂の器

【Nコード】

N53670

【作者名】

疾風怒濤

【あらすじ】

高校生、『大神 英司』はある日突然異世界に引き込まれ掛けるが、開き直ってむしろ飛び込んだ。

そこは、剣と魔法な世界の、魔導科学が盛んな先進国家『エルディアス』だった。

地球人の宿命として、チートな能力を手に入れた主人公は、魔導機械に全力を注ぎ込む。

いいの!?

主人公それでいいの！？
作者の趣味全開です。

タイトル変更しました。

第一話 貴様の力はその程度（前書き）

初投稿です！

未熟者ですがよろしくお願いします。

第一話 貴様の力はその程度

突然だが、『俺』こと『大神 英司』は、現在動けなかった。

・・・日曜日で高校は休み、昼飯を外で食べた後、ぶらぶらしつつ、ふと思いつき、近くの丘に登ってみた矢先の事だった・・・。

いきなり足元が薄紫に光ったかと思うと、俺を中心に同じ色に光る、魔方陣のようなモノが展開した。

「なっ!?!? ・・・なんじゃこりやあああ!?!?」

・・・思わず叫んでしまった・・・

魔方陣から出ようとすると、強い力で押さえつけられているようで、立っているのがやっとだった。

まるで、押さえつける力が、俺をそのまま何処かへ押し込もうとしているかのようだ。

「ぐううううッ!・・・」

くっ・・・苦しいっ!

このままだと押し潰される！？

なんとかしなきゃっ！・・・

・・・押してダメなら引いてみな？・・・

だっ・・・ダメだ・・・早くなんとかしないと！

くっ・・・一か八かだッ！！

俺は『力』を受け入れるかのように、力むのをやめた。

よし！　　いっその『力』を取り込むぐらいの気持ちで行こう！

「ハアアアアアッ！！」

ゆっくりと何かが染み込んで来るのがわかる。

「うおッ!？」

・・・まじか!？

正直もう死んだかなーとか思ってた・・・

・・・これが俺の最期のギャグになるのかと思ったんだが・・・

人生なんでも試してみるものだな。

「おっしや来ーい!ばっちこーい!ー!」

力をためているような、限界まで吐いて止めた息をゆっくり吸うような、空腹がみたされていくような、不思議な感じがする。

しかし、足りない。

もっと、もっとたくさん入るはずなのに、少しずつしか流れて来ない。

「もっと・・・もっとだッ！もっと力を、力をよこせええええッ
！！」

テンションのままに叫ぶ。
特に意味は無い。

『力』が渦巻きながら引き込まれて行く様をイメージして力を込める。

ゴオオオオオオオオツ！

体の周りで『力』が凄まじい勢いで渦巻いているのがわかる。

まるで川のように『力』が流れ込んで来る。

・・・しかし、未だ足りない。

全くもって足りない。

「オオオオオオオッ！！どうしたあッ！？貴様の力はこの程度の物かあッ！？」

さらに気合いを込めて叫ぶ・・・はたから見ると頭が沸いているようにしか見えない・・・

しかし、どんなに取り込もうとしても、一定以上の量の『力』は流れてこない。

「よかるう！ ならば、此方から出向いてくれるわあッ！」

・・・テンションがおかしい。
もはやキチ イだな・・・

そう叫ぶと、『力』の源流を突き止めるかのように、それを追いかけるかのように、イメージを操っていく・・・

ふいに世界が歪み、『大神 英司』は、この世界を去った。

第一話 貴様の力はその程度（後書き）

読んでくれた方、ありがとうございます！
感想もらえると嬉しいです。

第二話 緊急事態（前書き）

キャラの視点と第三者の視点が混ざって分かりにくいのは、単に作者が何も考えていないからです。

すいません。

第二話 緊急事態

『ボク』、こと『ユニエール・エストライゼ』は、驚愕していた。

今日は、伯爵でありながら技術者である父、カイゼル・エストライゼの依頼で、大規模な魔獣召喚実験にたちあいに来ました。何でも、成功すれば、最強の魔導生物兵器になるそうです。ボクは魔眼持ちだからマナの流れが見えるんです。

「マナコンバータ始動！」

「魔導回路接続！」

「術式、作動します！」

「さぁ・・・何が出るかな？」

この大掛かりな仕掛けは、異世界より強力な魔獣を安全に召喚しますが、それがどんな魔獣かは見当もつかないそうです。

「術式が展開しました！・・・どうやら目標を捕捉したようです！」

嚴重に隔離された召喚室の中で、薄紫色の魔方陣が浮かび上がっているのがマナスクリーンに映し出されます。

「さあ来い！我が国の平和の礎となるために！」

・・・ゴゴゴゴゴゴッ！！

「！？・・・こっ・・・これはッ！！」

「どうした！？ 何があつた！？」

「も、目標が凄まじい勢いでマナを掌握しています！・・・このままだと、この国の貯蔵マナが全てが取り込まれかねない勢いです！」
「そっ！？そんなバカな！？・・・全てだと！？この国が五年はまかなえる量だぞ！？」

「と、停める！実験は中止だッ！」

「・・・と、停まりませんッ！ 目標に逆探知されましたッ！
完全に掌握されています！」

「ええいッ！回路を遮断しろ！召喚室を隔絶するんだ！」

「駄目です！もはや向こうの方が出力が上です！」

「あ、あり得ない・・・下手をすれば霊脈が枯れる可能性すらあります！！」

「なっ・・・なんてことだ・・・こんなことになるなんて・・・」

な、なんだかとてもなくともない事態になって来た・・・
も、もしかしたらボクは、この国の終わりをこの目で見ることになるかも・・・

魔眼があるボクには、凄まじいまでのマナのせめぎあいと、とてもない魔力の干渉が見えます・・・

今のボクにできるのは、この出来事を見届けることだけ・・・

・・・うう・・・まだ死にたくないなあ・・・

・・・今までに食べたお菓子と、まだ試していないお菓子が頭の中でぐるぐると駆け巡る・・・

「まだ・・・まだ死ぬわけにはいかない！」

ボクにはまだやらなきゃいけないことがたくさんあるんだ！！

ボクは決意を新たにした。

相変わらず周囲は大騒ぎだ。

「捕縛術式と制御術式、停止結界と防御結界、魔法障壁を展開しろ
！！

こうなつたらなんとしてでも捕らえるんだ！殺しても構わん！なん
としても奴を停めるんだ！！」

「了解！」

「術式展開、急げ！ 予備も全部出せ！」「迎撃態勢を整えろ！
各員に通達！なんとしてでも食い止めるんだ！」

その時、隔離された召喚室の中が、ひときわまばゆく輝いた。

そして次の瞬間・・・今までの事が嘘のように静寂が広がった。

・
・
・そして、部屋の真ん中に、一つの影がたたずんでいた。
・
・。

第二話 緊急事態（後書き）

感想とかもらえる嬉しいです！

第三話 ゲット・・・だと？（前書き）

PVが500を超えました！

読んでくれた方、ありがとうございます！

第三話 ゲット・・・だと？

・・・閃光が止み、歪んだ世界が元に戻った。

気が付くと、そこはおかしな金属と石の部屋の中だった。

いつの間にか、かたひざをついている。

足元には複雑な幾何学模様が彫りこんであり、奇妙な機械があちこちに埋め込んであった。

とりあえずゆっくりと立ち上がる。

「・・・・・・・・」

部屋の中は静まりかえっている・・・

・・・と、その時、唐突にどこから叫び声が聞こえてきた。

この時、外では兵士や研究員達が、

「ま、魔人なのか!？」

とか、

「今だ!今のうちに捕縛術式と制御術式を!!」

とか言っているのだが、この時の英司がそれを知るよしもない。

部屋の中に再び光が満ちる・・・

英司の周りを、囲うように現れた光の輪が、縮まってくる。

そして頭上からは怪しげな光が降り注ぎ、英司を包む。

「なっ!?!なんだ!?!・・・またか!?!またなのか!?!」

そして輪が英司の体を締め付ける。

「ぐッ!?!」

じゃ、ジャマくさい!

それになんかこの光を浴びていると、頭がクラクラする!

英司は、光と光輪から逃れようと、身体に力を込めた。

ブワッ!!

・・・次の瞬間、光と光輪が、あっけなく吹き飛んだ。

それと一緒に、部屋の魔術的な設備も、その負荷に耐えられず吹き飛んだ。

相変わらず部屋の外では、兵士や研究員達が、

「ば、バカなっ!?! 下級龍種まで従えられる設備だぞ!?!」

とか、

「くッ! コイツを市街地に入れるわけにはいかん! 殺せ!

なんとしても食い止めるんだ！」

とか騒いでいたが、勿論英司が知るよしもない。

英司は、ドアらしきところを見つけて、部屋から出ようとした。

・・・開かない。

しかたがないので蹴っ飛ばしたら、これまたあっけなく吹き飛んでしまった。

ちなみにこの時、外の兵士や研究員達は、

「と、特注の強化ドアが!?!」
とか、

「ええい! バケモノめえツ!!」

とか叫んでいるのだが、当たり前如く英司が知るよしもない。

外に出ると、部屋の周りは、剣や盾、槍、杖などで武装した兵士(?)達に包囲されていた。

「うおッ！？ なんだ！？ なんか用ですかッ！？」

なんで囲まれてるんだ！？

そしてなんで皆さんこんなに殺気立ってるんだ！？

兵士（？）達は、

「 ！！」

・・・などと叫びながら、全員が武器を構え、抜群のコンビネーションで襲い掛かって来た。

「うわぁッ！？」

英司は、打ち掛かって来た武器から、身体を庇おうと咄嗟に腕を交差させた。

すると、
「ヴンッ！」

という音を響かせて、数々の武器が弾き返された。

矢のように飛んでくる攻撃魔術も、当たる前に全て弾け飛んでしまった。

あっ・・・あれ？　生きてる？・・・

今度こそ絶対死んだと思ったのに・・・

もしかしてここは天国？

「　　！！」

OK理解した、ここは異世界だな！

・・・っちツ、まったく・・・現実逃避くらいさせろってんだ！

相変わらず、目の前では武装したオッサン達が凄まじい形相で武器を振るっている。

うん、こんな天国はイヤだ。

しかし、どうやらオッサン達では俺を傷付ける事が出来ないらしい。

・・・なんで？・・・

・・・まあいいや・・・

「落ち着け！　話せばわかる！」

「　　！！」

・・・イラッ・・・

取り敢えず、いきなり襲われて若干腹が立ったので退いてもらおう。

「・・・フンぬッ！」

バキッ！

「
x!？」

なんか叫び声を上げて吹き飛んだ。

そして、腰を据えて拳を繰り出す。

「そおらそらそらそらそらそらッ！！
どオしたどオし
たアアッ!？」

ドガガガガガガッ！！

拳が風を斬り、男達が吹き飛んで行く・・・

なんか・・・拳から衝撃波みたいなのが・・・

「テンション上がってキターっ!!」

不思議だがまあ問題無いな！

・・・気が付くと、英司は1人、屍（死んでません）の山の中にたたずんでいた。

・・・まさしく『死屍累々』とゆうやつだな・・・

・・・い

「ん？」

今なんか聞こえたような？・・・

・・・お・・・い

「誰だ？」

・・・おーい・・・

・・・どうやら今の部屋の中から聞こえてくるらしい・・・

「ハイ、ごめんよー？」

のれん風に入ってみる・・・

「・・・聞こえているなら助けてもらいたいのだが・・・」

「！？ 誰がいるのか！？」

「……じじじゃ……部屋の真ん中じゃ……」

「……誰もいないぞ？」

「真ん中に取りつ手が埋まっているじゃろう？」

見ると確かに取っ手がある。

「……これは……回して引くのか？」

英司は、それを掴んで回しながら引っ張ってみた。

……ズゴォッ……

「おお……なんか出てきた……」

部屋の中心部から、直径20cmぐらいの筒がせりあがってきた。

すると、

・・・バシユツ・・・

・・・と音がして、前半分がスライドして開く・・・

・・・そこには、蒼い宝玉が埋め込まれた短剣が刺さっていた・・・

「なんだコレ？」

「私の本体じゃ！」

「なっ、なんだってー!？」

「・・・お主、りあくしよんが軽いの・・・」

まあそれは良いとして、私をここから出してくれんかのう？」

「いや、別にいいけど・・・あなたは何者？」

「私か？私は最高位の大精霊様なのじゃ！」

精霊！？・・・この世界、精霊までいんの！？

「・・・フーン・・・じゃあなんでその、最高位の大精霊様が、こんな所におさまってるの？」

「そ、それは・・・まだ精霊に成り立てだったところに、拘束・制御術式に捕まってしまったのじゃ・・・」

それ以来、この宝玉に封じ込められて、あらゆる実験や研究の魔導こんとろーるのさぽーとやらをやってるうちに、いつの間にか位が上がっていたのじゃ・・・」

「成り立て！？　じゃあその前はなんだったの！？」

「ふっふっふ・・・聞いて驚け・・・なんと！　若くして死んだ、天才美人大魔導士だったのじゃ！！」

「・・・へえ・・・てか人から精霊になれるんだ、へー」

「なっ・・・なんじゃその目は!？」

本当じゃぞ!？」

本当に美人で天才な大魔導士だったんじゃぞ!？・・・まあ良いわ・

・取り敢えずこの台座から外してくれい。

そうしたらかわりに私がお主をさぽーとしてやろう!

精霊契約、精霊の加護とゆうやつじゃ!」

「加護って・・・何ができるの?」

「例えば、魔術による常時翻訳とか、魔術のさぽーととゆうやつだな!

というかこのケースの中はもうこりこりなのじゃ!」

・・・なんて便利な・・・

「OK、別に損するわけでもないし、・・・色々サポートしてくれれば助かるな!・・・というわけでこれからよろしくな!」

「うむ!　　こちらこそなのじゃ!」

「精霊ゲットだぜ！」

「ゲット!？」

・
・
・ 旅の仲間が増えた。

第三話 ゲット・・・だと？（後書き）

というわけで、サポートキャラ登場です！

展開によってはヒロインBあたりになるかもしれませんが

ではまた近いうちに！

第四話 改めてよろしくと・・・（前書き）

今回は追加ってかんじでみじかいです・・・

PVが1200を超えました！

ありがとうございます！

第四話 改めてよろしくと・・・

「・・・で、そういえばなんで俺達会話ができるんだ？」

「私は精霊だから色んなことが出来るのじゃ！」

契約主が会話出来るようにするぐらい、朝飯前なのじゃ！」

・・・精霊すげー・・・

「さてよ・・・じゃあその語尾に『じゃ』とか付いてんのはなんだ！？」

こつちの世界の言葉で『 × じゃ！』

・・・とか言うワケじゃあるまい！？」

「そついう仕様なのじゃ！」

・・・おい精霊テメエ・・・

・・・まあいい。

「さて、これからどうしよう・・・」

そう、立て続けに色々あって流していたが、ここは異世界なのである。

「すまぬ・・・私がこの召喚術式を制御していたのじゃ・・・
そして今の私はあるじを元の世界に還してやる事が出来んのじゃ・・・

あるじには迷惑を掛けてしまったのう・・・」

「ふむ・・・」

それはお前の意思でやったのかね？」

「いやそれは違うが・・・」

「ならそんなに気にすんな、」

それに、向こうの世界は退屈で、面白味がなかったんだ・・・

こんな見たことも無い新世界で暮らせるなら本望だ！

それに・・・そりゃ確かに1人で放り出されたら困るけど、お前がサポートしてくれるんだろー？

誰もが皆、そんなんじゃないんだ、お前みたいなのがいってくれてラッキーだったよ。」

「そ、そうか・・・」

「ならば困った事があつたら何でも私に相談するのじゃぞ？」

「おうよ！・・・所でいつまでもお前って呼ぶのもアレだな・・・
名前はなんていうの？」

「・・・フィア、と呼んでほしい」

「了解・・・改めてよろしくな、フィア」

「うむ、こちらこそなのじゃ」

第四話 改めてよろしくと・・・（後書き）

感想もらえると嬉しいです！

第五話 実在するとは思わなかった（前書き）

PVが2000を超えたよわーい！
ありがとうございます！

いまさらですが、不定期です。

第五話 実在するとは思わなかった

ユニエールの目の前では、凄まじい光景が繰り広げられていた・・・

騎士や、魔導騎士たちが片端から吹き飛ばされて行く・・・

召喚室から現れたのは、とても珍しい漆黒の髪と目をした少年だった。

現れると同時に、部屋の設備を吹き飛ばし、強化扉を蹴破った。

不思議と敵意は感じなかった。

・・・優しくそうな目をしているが、何を考えているのかはわからない。

しかし、騎士達はいきなり斬り掛かった。

ユニエールは思わず悲鳴を上げかけた。

・・・しかし、だれひとり少年に傷を負わせることは出来なかった。

「あ、あれはもしかや魔法障壁！？
あんなに効率悪いのに出しばなしで全身を覆いながらあんな強度
！？」

つい説明的なセリフをしゃべってしまう

少年は何かを話し掛けようとしていたが諦めたらしく、顔付きをガラッと変えると、異世界の言語で雄叫びを上げながら暴れた。・

少年は全ての敵を沈黙させると急に振り返り、何事か喋りながら部屋の中へと戻っていった・・・

・・・ど、どうしよう・・・騎士さん達は全滅しちゃったし・・・

・・・でもみんな気絶してるだけみたいだなあ・・・

それに、なんか話し掛けようとしてたみたいだし・・・

最初は敵意もなさそうだったし・・・

いつの間にかみんな居なくなっちゃったし・・・

・・・ちょっとこわいけど話し掛けてみよう・・・

・・・身振り手振りで・・・

などと考えていると、少年が部屋から出てきた。

よ、よし、いまだ！

「あ、あのう・・・」

・・・どうしよう！？
つい勢いで話し掛けちゃったけど、何話せばいいんだろ！？
って話せないんだ！？

・・・うう・・・帰りたいよう・・・

「む、今度はなんだ！？」

「ご、ゴメンなさっ！・・・
あれ？」

喋れてる!？」

さっきはどうしても話しが通じてるようには見えなかったのに・・・

「ああ・・・今ちょうどこの大精霊さまと契約したからな・・・」

ええっ!？」

「精霊契約!？」

い、いつの間に!？」

てゆーかとっても難しいんだよ!？」

「そうなの・・・まあ拾ったようなもんだけどな」

「「拾った!？」」

約二名が衝撃を受けていた。

「ってその短剣が？」

「わかるのか？」

「う、うん・・・ボクは魔眼持ちだからね・・・」

そう、マナや魔力の流れが見えるのだ。

「なん・・・だと!？」

「う、ゴメン・・・気持ち悪いよね・・・」

魔眼は、特に害をなす物ではないのだが、いまだに『見たら呪われる』だのといった迷信、差別や偏見にさらされることも多い。

「ボクっ娘だと!？」

おいフィア!？ この翻訳はどうなってやがる!？

・・・この世界にはそんなモノが実在しているというのかッ!？」

「気にするのはそこなのかッ!？」

「や、やっぱり変かな・・・わ、わたしとかのほづがいいかな?・・・」

「お前もかッ!？」

フィアは空気ガン無視の2人に挟まれて泣きそうだった。

「いや!　良いと思います!　
かわいいと思うよ?」

「かわっ!？」

「んでもって魔眼だと!？
目が金色っぽいのはそれでか・・・
・・・綺麗だな。」

「きれっ!？」

「・・・いやそうじゃなくて魔眼なんだよ？
不気味じゃない?・・・」

「かつこいいな。」

「邪気眼よばわりされないかが心配だが。」

「そ、そう・・・ならいいけど」

「い、いいのか・・・」

「フィアはなんだか疲れているようだ。」

「そ、それで、これからどうするつもりなの?」

「ああ・・・俺らもどうしようか相談してたところなんだ・・・」

「・・・」

ボクたちが召喚実験なんかしたばかりに・・・」

「ああそのくだりはさっきやったからいいや」

「へ？」

「別に俺を狙って困らせるためにやったわけじゃないんだろ？」

まあ事情はあとで詳しく聞かせてほしいけど。

まあ元いた世界より楽しそうだし、まだこの世界のこととかわからないし、知り合いもフィアの他にいないから助けてくれると助かる。

「

「う、うん・・・この実験やったのはうちのお父さんだし、もちろん助けるよ！」

「うん、よろしくな！」

・・・俺は大神 英司だ。

・・・英司が名前な？」

「うん、よろしく・・・エイジ
ボクはユニエール・エストライゼ
・・・ユニってよんでね？」

「ん、よろしく、ユニ」

「さて・・・それにしてもこの状況、どうしたものか・・・」

「ふむ・・・私がサポートするから、広域回復魔術でも使ってみたらどうじゃ？」

「おお！

出来るの魔術!？」

「もちろんじゃ!」

「えっ!？」

さっき使ってたんじゃないの!？」

「いや、俺のいた世界には魔法がなかったんだよ。
・・・てかさつか・・・さつき俺がやってたのは魔術だったのか・
・
便利だな魔術！」

「いや普通あんな便利な魔術は無いよ？」

「あるじの膨大な魔力だからこそじゃな」

「そうなのか・・・
それってもしかしてすごい？」

「凄まじいよ」

「フツ・・・さすが俺！！（キラッ）」
・・・ムダにカッコいいポーズをとって歯を光らせた。

「・・・うんまあ魔力はすごいよね・・・」

「そうじゃな」

「おまえらなんだその目は？」

「別に」

「ならばよし」

「・・・それじゃ、やってみるか」

「うむ」

「・・・じゃあ私の短剣にマナを送り込むのじゃ！
術式の構築は私がやるからのう」

「どうか？」

英司は、短剣を握りしめると、『力』を送り込むようにイメージし

た。

「うむ、行くぞ！」

ウンッ！

と、音を響かせて、短剣の宝玉が輝く。

次の瞬間、足下から青白く光る魔法陣が広がった。

魔法陣はみるみるうちに広がっていき、倒れている全ての人を包んだ。

そして、魔法陣がひときわまばゆく輝いた。

その光がおさまったとき、負傷者は全て回復していた。

「・・・なんて非常識な回復魔術・・・」

「まさかこれほどとはのう・・・」

「さすが俺！」

「・・・あるじよ、何がすごいのかわかっておらんじやろう・・・」

「効果範囲広いとか？」

「それもだけど・・・回復魔術つてのは、対象の治癒力に上乘せる程度のモノなんだよ・・・
それをこの規模で全快させるなんて・・・それも一瞬で・・・
これを非常識といわずしてなんていうのさ・・・」

「そうか・・・オラわくわくしてきたぞー！」

「・・・なんかもういいや・・・」

「うむ、気にしたら負けじゃな」

「なんだ？」

・・・英司は一人不思議そうにしていた。

第五話 実在するとは思わなかった（後書き）

はい！まさかのボクっ娘でした！

男だと思いました？

・・・え？気付いてました？

あ、あざといですと！？

・・・まあそれはおいといて。

いやなんか異世界モノのヒロインというと、『青髪ロング』が多いというイメージがあつたのですが・・・

というわけで金髪ショートのボクっ娘が登場です。

今のところメインヒロインな予定ですが、どうなるかはわかりません。

・・・なんでボクっ娘にしたかつて？

それは、ニコニコで、ロンさんの【『おちゃめ機能』歌った】を聴いた時、「ボクっ娘、アリだな！」・・・と、思ったからです。

あれは凄まじい中毒性ですね。

ではまた。

第六話 オッさんもやるじゃない（前書き）

読んでくださった皆さん！

どうもありがとうございます！

遅くなってごめんなさい！

実は、前回のすぐ後六話を書いたのですが、これ話し飛びすぎだな・

・・ということ、二話あいだにはさんだりしました。

その分、一気に更新だぜ！

・・・と、行きたいところですが、現在チェック中です。

では。

第六話 オッさんもやるじゃない

その後、ユニが周りを取りなしてくれて、なんとか丸く収まった。

さすがは伯爵の娘と言ったところだな！

そしてその後、研究者や伯爵に会ってから、皇帝に謁見する事に決まった。

この国は、一応『帝国』なのだそうです。

リアル皇帝を見るのは初めてなので、楽しみだなー。

まずは、研究所の人達。

なんか、元いた世界の話を色々きかれたけど、めんどくさかったの
で、適当にはぐらかした。

次に、ユニの父親、カイゼル・エストライゼ伯爵に会った。

「突然異世界に召喚してしまい、申し訳ない事をしたな。
すまない。」

「あー・・・いえ、確かに困ったけど・・・
俺が元居た世界より面白そうだし、帰る方法が見つかるまで、この
世界を見て回れたらな、と思ってますよ。」

「そ、そうか・・・
前向きだな。」

「はっはっは
それほどでも！」

「う、うむ・・・それまでの間の生活は、私が保証しよう。」

「えっ？・・・あ、ありがとうございます。」

「・・・ところで・・・君はいつたい何者なのだね？
なんとゆう種族なのだろうか？・・・
・・・聞かせてはくれないかね？」

このオッさんは真顔で何を言い出すやら・・・

「いや、俺は人間ですが。」

「いやしかしその魔力は・・・
ハッ！？・・・もしか魔王なのか！？」

「いやいやいや！」

俺、向こうの世界では普通に学生やってましたから！

「学校に通っていた、となれば、やはりそれなりな身分の生まれでは!？」

「いや違いますって・・・」

俺のいた世界じゃ、義務教育って言って、子供は皆、学校行って勉強する義務があるんですよ。」

「ほう！ それは素晴らしい制度だ。
勉強とは、何をやるのかね？」

「それは勿論魔王になる為の勉強さアッ!！」

「ぬおオツ!! やはり魔王につらなる者であつたかあッ!？
者共、曲者じゃあッ!!
であえ、であえエいッ!!」

・・・とまあ冗談はさておき。」

「ええ。 普通に一般教養とかを学びますね。」

「「「だああああッ！」「」」

・・・衛兵達が派手にずっこけていた。

第六話 オッさんもやるじゃない（後書き）

話しのわかるオッさんでしたね！

ではまた近いうちに。

第七話 謀ったな！？ 誰とは言わないけど、謀ったなッ！？（前書き）

そういえばpv4000超えていました！

わーおびつくりだぜ！

感謝です！

第七話 謀ったな！？ 誰とは言わないけど、謀ったなッ！？

俺は、皇帝陛下に謁見する為に、カイゼル伯爵とユニと一緒に、皇室まで来ていた。

とは言っても、この研究所は皇城の敷地内・・・というか繋がっており、時間はかからない。

なんでも、こんな事は色んな意味で前代未聞だそうな。

皇室は凄まじいところだな。

なんか皆が跪いたり、口上をのべたりしていた。

すげー・・・

まさしく皇帝の住み処って感じ・・・

でも豪華ってよりも、趣味の良い実用的な感じがする。

「余が、エルディアス三十二世、ティーリス皇帝だ。」

・・・とかはさておき、そなたは異世界から来たそうだな！？

是非とも、そなたの居た世界の話をきいてみたいものだ！

おっと・・・そういえばそなたの名はなんとゆうのだ？」

「えっ、あ、大神 英司といいます？」

「なぜに疑問形なのだ・・・」

カイゼルのオツさんが横から小声で突っ込んできた。

「いや、俺の居た国には皇帝とか王とかいなかったし・・・
国のシンボルみたいな人はいたけど、別に権力持ってなかったし。
正直どうしたもんかと・・・」

「お、おい・・・」

あ、声大きかったかなー？

「ほう！？ 王も皇帝もないとは、それではどうやって国は成り立っているのだ！？」

「それは・・・えっと、民主主義と言ってですね・・・」

などと、元居た世界のあれこれについて、根掘り葉掘りきかれた。

正直疲れきってダルくなってきたころ、横手にある小さなドアから、誰かが覗いているのが見えた。

「ん？」

「どうした？」

「いえ、あそこのドアに不審者が・・・」

「なに？」

と、その不審者と目があつた。

「ひゃっ!？」

・・・え？ もしかして、不審者って私のことですか？」

「うん、不審者にしか・・・」

「あ、あー・・・すまん、その者は不審者ではなくてだな・・・
そのー・・・娘だ。
名はルセリナとゆう。」

「へ?・・・あー・・・それは失礼おば・・・」

なんか語尾が変になっている

「・・・えつと・・・なぜに皇女さまがそんなところに？」

「偶然ですよ？」

「ウソだッ!!」

・・・いかん、つい突っ込んでしまった・・・

いかん！ フォローしなければ！

「しかし、いいセンスだ！」

・・・正直、ミスった感が否めない・・・

「そ、そんな！・・・照れますね！」

あれ！？ いいの！？

「・・・余はルセリナと初対面でまともに会話できる奴を初めて見たぞ・・・」

どうやら、皇女さまに入れてしまった突っ込みはおとがめなしのよ

うだ。

・・・周りは白い眼で見ているが。

しかし、さっきから、なんか変な気配がする。

先程、兵士のおっさん達に斬りかかれた時のような・・・

でも俺が狙われてるわけでもなさそうだ。

さっきとは違う気がする。

まさか暗殺者がいたりしてね？

・・・なんかそんな気がしてきた。

・・・これがフラグというやつだろうか。

気合いで暗殺者とかわからんものだろうか・・・

試しに、『力』を広げてみる。

（それを感じ取ったのか、ユニが
「えっ、エイジ、突然なにを？・・・」

・・・と言っているが、英司は気付かなかった。）

すると、その『力』でなぞるかのように、周りの物が感じ取れる。

皇帝や皇女、横にいる伯爵やユニ、後ろに控えている衛兵や、柱の陰に寄り添っている人影、部屋の外に控えている衛兵や、廊下を歩いているメイドさんまで。

うわ、本物初めて見た！・・・見えないけど。

・・・よし、何も無いな。

．．．ん？．．．柱の陰？．．．

「あのー．．．皇帝陛下？

つかぬことをお聞きしますが．．．」

「なんだ？」

「護衛の人は、どこにいます？」

「お主の後ろにいるではないか。」

「それで全部ですか？」

「そうだが．．．いつたいなにを．．．」

「では、その柱の陰にいるのはいつたい？・・・」

そこまで言った時、陰に隠れていた男は、

「ちッ！」

と、吐き捨てると同時に、魔力を操り、マナを練り上げて魔術を放とうとした。

やばい！？

俺は瞬時に、皇帝の前に飛び込んだ。

やけに身体が軽い。

「ヴンッ！」

目の前で、魔術が音を立てて弾かれる。

「なにッ!？」

しかし、相当の手練れらしく、魔術が効かないと見るやすぐさま身を翻し、皇女さまを捕まえてナイフを突き付けた。

「きゃあッ!？」

「しまった!？」

「全員動くな! 武器を捨てろ!」

「い、いや、はなして!」

「……くッ……皆、ゆうつおりにしろ……」

や、ヤバイ……予想、大的中!

・・・どうしよう・・・

・・・『力』で武器だけ弾けないかな？・・・

・・・行けそうだ！

よし！！

「せいッ！！」

「パキイン！！」

と、音がして、ナイフが弾け飛んだ。

次の瞬間、

「オラオラオラオラオラオラあッ!」

「ぐはあッ!」

男は苦悶の叫びを上げて吹き飛んだ。

「・・・ふう・・・一度やってみたかったんだよな！
・・・っと！

大丈夫ですかー？」

「え、ええ・・・あ、ありがとうございます・・・。」

青ざめていた顔が、もう赤みがかっている。

意外と気丈な人だな。

「なんとまあ・・・」

英司よ、礼を言うぞ。

危つく余も娘も、命を落とすところだった。」

「い、いえ、別にそんな・・・」

夢中でして・・・」

「ほ、本当にありがとうございますっ!」

皇女さまがお礼を言ってくれる。

「いえ、べつに・・・それほどでもあるぜ!」

「はいっ!」

肯定されてしまった。

「・・・なんか肯定されるとそれはそれで困る・・・」

「ふむ・・・エイジよ」

「なんででしょう?」

「礼の方は後日、するとして・・・」

「いえ、いいですよそんな・・・」

「まあそういうな。」

「この場合、受け取らない方が失礼にあたるのだ。
・・・それはさておき、一つ頼みがある。」

「な、なんででしょう?」

「時たま、ここに遊びにきてはくれまいか。」

「へ？」

「余も正直退屈・・・ゲフンゲフン・・・
娘の話し相手とかをしてもらえると良いのだが。」

「は、はぁ・・・そのくらいでしたら。」

「そうかそうか。
で、そなたは学生だ、というておったな。」

「そうですが・・・」

「うむ、ならばここでも学生をやるがよい。」

な、なんだと!?

せっかく学校もないし、遊び回ろつとか思ってたのに!?

なんとしても断らねば!

「いやしかし学費とか」

「勿論此方で出そう。」

「いえ、そうではなく」

学校とかちょーめんどそう!

「なんだ、遠慮するな。
控えめなやつだな。」

「いえ、そうでもなく・・・」

「わーエイジも学校行くの?
いつしょだねー!」

！？ツ ユニ！お前もかツ！？

「エイジ様も行かれるのですか？
いっしょですねっ！」

くッ！？ 周りは敵だらけかッ！？

・・・ふと、皇帝と目があつた。

楽しそうに、笑っているが、目がこつ言っていた。

・・・逃がさんぞ？・・・

・・・と。

「くッ！・・・ 謀ったな！？」

「クッククク・・・ まさかそなたも断れまい!!
ハッハッハッハ!」

「してやられた・・・
さすがは皇帝ということかッ!」

「フッ・・・ そなたが学生だったのがいけないのだよ」

「・・・お父様とエイジ様、楽しそうですね・・・」

「そうですねー」

・ ・ ・ といっわけ、俺の学園行きが決まってしまった ・ ・ ・

第七話 謀ったな！？ 誰とは言わないけど、謀ったなッ！？（後書き）

皇帝は忙しいけど、退屈なのです。

そして、皇女さまフラグですね！

そのうち学園編になるかもしれませんが、それは主人公がもっとメ
カいじったりチートアップ（チート能力がパワーアップ）してか
らです。

第八話 デイレイは男のロマンだっぜ！（前書き）

思いの外、早く投稿できました！

とゆうわけで、怒濤の三連投稿、最後の二话です。

・・・どれも短いですけどね。

第八話　ディレイは男のロマンだっぜ！

英司は、ひとまず研究所近くの部屋に泊まる事になった。
とは言っても、皇城の中だ。

ちなみに反対側の部屋はユニの部屋になっている。

以前は、研究所の予備の部屋だったが、今ではユニ専用の研究室のようになっているそうだ。

家具なども、ひととおりそろっている。

面識がある者が近くに居た方がいいだろう・・・という事らしい。

最低限必要な物は、研究所の方で用意してくれるそうだ。

とりあえず特にやる事がなくなった英司は、ユニと共に、大きな演習場のような場所に来ていた。

ユニとファイアに頼んで、魔術を教えてもらっ事になったのだ。

「それじゃ説明するよ？」

「チュートリアル編キター！！」

「・・・よくわかんないけど楽しそうだね・・・
まあいいや。

まずはマナと魔力についてだね。」

「うむ、基本じゃな」

「この世界は、マナで満ちているんだ。

英司のいた世界には、マナや魔術が存在しなかったって本当なの？」

「ああ、なかったな。

物語の中とかならたくさんあったけど、実際に見たことないし、きいた事はあるけど大抵インチキだし。

それに、このマナっていう『力』も感じたことはないよ。

それに比べてこの世界は、なんだか『力』に溢れてるような感じがする。」

「それは不思議なのじゃ・・・本来、生き物はマナが無いと生きていけないのじゃ・・・」

「まあそれはおいといて続き。」

「うむ。」

『マナ』とは、世界に満ちており、どこにでもある。

まあ、霊脈などと呼ばれる場所から湧いているともいわれているのじゃ。

この近くにもあるのう。

そして、生き物も体内において、僅かながら作り出すことも出来るようじゃ。

そうは言っても本当に僅かじゃがの。

そして魔力じゃ。

これは、マナを操作する力のことじゃな。

これが強ければ強いほど、支配下におけるマナの量や効果範囲、魔術の効果や術式強度も強くなるのじゃ。」

「なるほど、魔力は強い方がよい、と」

「まあそんな感じじゃ。」

「それじゃ、魔術についてだね。」

魔術、と言ってもいろいろあるけど、大きく分けて2つあるんだ。」

「魔法陣や魔術回路を利用した、『集積魔術』。

それと、基本的に詠唱のみで発動させる『詠唱魔術』じゃな。」

「なるへそ。」

「まず集積魔術だけど、エイジがさっきやった回復魔術。あれが集積魔術ね。」

まああれは結構特殊だけど。

今この国で一番盛んな『機構魔術』も集積魔術だね。

マナを送り込むことによって動いたり、効果を出したりするんだ。『魔導機械』っていうんだけどね。

ボクもそれが専門なんだ。

で、今からやるのが詠唱魔術。

単語を発してイメージを練り上げ、それに感応することで魔力によってマナを操作して、簡単な超自然現象を起こす、最もポピュラーな魔術だよ。

火を出したり、風を吹かせたりするんだ。

極めれば無詠唱でも使えるらしいよ?」

「それは楽しみだな!」

「唱える詞は、だいたい3つ以上の言葉で出来るんだ。

『起こしたい現象』、『それをどんなカタチにしたいか』、『何をしたいか』

の3つだね。

これを唱えることによって、明確に術式をイメージして行使することが出来る。

あとはテンションを上げて、自分のカッコよさに酔うことによって魔力が強くなるらしいよ?

だから、同じような効果でも、色んな詞があるし、もっと長かったりもするよ。」

「自分に酔うって・・・
なんだかなー・・・」

「うん・・・」

だから魔導士にはイタい人が多いってゆう噂もあるよ。」

「そういえばフィアって大魔導士だったな！」

「な、なんじゃその目は！？
み、見るな！」

私はイタい子などではないのじゃ！」

「どうやら黒歴史のようだな・・・
まあいいや。」

「んじゃ、ちょっとやってみせるね・・・
『風よ、集え』」

ユニがそう唱えると、ふいにユニの周りの空気が渦巻き、差し出された掌の上に集まり始めた。

「こんな感じで起こしたい現象を言ってイメージするんだ。『集いて、敵を撃て』！」

掌に集まった風の塊が飛んでいき、広場の真ん中に叩きつけられた。

砂ぼこりが止むと、地面の表面が吹き飛ばされて小さくへこんでいた。

「まあこんな感じかな。」

「おおっ！

かっこいいな！」

「本当は『風よ集いて敵を撃て』って繋げて言うんだけどね、意味が解ればけっこうどうでもいいんだ。」

じゃ、やってみよう。

まず、周りのマナを把握するんだ。

魔力って言っても、要はイメージだからね。

なんかこう・・・力で風をうわぁーって動かして渦巻かせて加速させながら掌に集めるイメージ」

「まんまやん・・・」

目を閉じて集中する。

すると、まるで空気のように、自分の周りに『力』が溢れているの
がわかる。

・・・なんだ、使いたい放題じゃないか・・・

『力』がある空間にある空気を、その『力』を以て掌握する。

・・・まるで空気分子の一つ一つが感じ取れるようだ・・・

「風よ集え」

把握した空気を加速させ、掌の上に集める。

加速は消さずに、そのまま掌の上で回転させる。

「・・・・・・・・・・ジ・・・・・・・・エイジ！」

「はっ!？」

目を開けると、驚いているようなユニの顔があった。

なんだか掌が熱い。

「ねえ・・・・・・・・エイジ・・・・・・・・それなに？」

言われて掌の上を見ると、シュゴオオオオッ!!と音をたてなが

ら・・・

・・・光る球体が浮いていた。

「なんで!?!」

そんなバカな!?!?

ちゃんと風をイメージしたのに!?!?

「ボク知らないよ!?!」

ついにはバチバチと放電を始めている。

「そうか!

これはプラズマだ!

圧縮された空気が、高圧、高熱になってプラズマ化したんだ!

・・・バチバチいつてんのは静電気かな？」

「なにそれ？」

「クツクツク・・・此れなるは原初の光・・・
万物を光と還す、根源の光よ！！」

「はいはい。・・・で？」

「・・・グスツ・・・ヒドイや。

・・・これに触ると、光になって消滅するよ。
高熱の火に似てるけど、これだと灰も残らないよ。」

「す・・・スゴい・・・ね？」

「まあ材質とか大きさにもよるけど、理論上、これで壊せない物質
はなかったよ。

少なくとも俺の世界では。

・・・たしかそうだった・・・ような気がする。」

「・・・曖昧だね・・・」

「別に専門家じゃないもん。」

「適当じゃのう・・・」

とりあえず放ってみたらどうじゃ？」

そうだ、少し面白い事を思い付いた・・・

「よし・・・『集いて敵を撃て』！」

・・・ヒュボッ！

・・・という音がして、50mぐらい先の地面に穴を開けて潜り込んだ。

「よく飛ぶのう・・・」

しかし思いの外、地味じゃの。」

「穴開けたのはスゴいけどね。」

・・・フツ！ そんな事を言ってられるのも今の内だ！

クツクツク、見るがいい！

「爆発！！」

ドッゴオオオオオン！！

・・・次の瞬間、地面が吹き飛んだ。

「・・・」

「フツはツはツはツはツ！
見たかこの威力！」

「・・・うわぁ・・・」

・・・そこには、25m程のクレーターが出来上がっていた。

第八話　ディレイは男のロマンだっぜ！（後書き）

すいません別に知識もないのにプラズマとか書きました。

電気についてもよくわかんないのに書きました。

調べてみたけどよくわかんなかったんです。

誰か、詳しい人がいたら簡単に説明していただけないでしょうか！

なんかかつこいい使い方とかがあったら採用するかもしれません。

第九話 乙女の秘密と夢物語（前書き）

遅くなってすいません。

作者が話を思い出けなかったので遅れました。

では！

第九話 乙女秘密と夢物語

気を取り直して、ユニにいろいろと案内してもらったことになった。

いやー・・・皇城って広いなー！

そして、ユニの部屋も見せてもらった。

部屋の一画に、家具類、ベッドやクッションなどがまとめて設置してある。

そこだけ見れば、女の子らしいと言えなくもない。

・・・しかし、それ以外の場所は、怪しげな機械や実験器具、工具などで埋めつくされていた。

「や、やっぱり女の子らしくないよね・・・」

なぜかユニが落ち込んでいる。

しかし、何を隠そう・・・この俺こと、大神 英司は、機械とか工作とか大好きなのだッ!!

「何を言う！」

俺は大好きだぞ!？」

「ええっ!?!?!」

風邪だろうか？

ユニの顔が赤い。

「メカは良い!

とても良い部屋だな!」

「・・・あ、ああ・・・うん

・・・ソウダネ。

ソウダヨネ。

・・・はあ。」

なんだか急にユニが不機嫌になった。

「ん？ どうした？」

「なんでもないよ。・・・はあ・・・。
・・・まったく、エイジって・・・」

「え？なんか言った？」

何か言っていたけど聞き取れなかった。

「何でもないよ。」

「・・・それより、エイジには謝らなくちゃいけないことがあるんだ。」

「え、何かやらかしたの？」

「や、やらかしてないよ？」

ただね、ボクとエイジの部屋にはそれぞれ地下室があったんだ。」

「あつた？」

何故に過去形？

「うん。」

あつただけど・・・

ちよつと前に、こつそり壁を取り壊して部屋を繋げて使ってたんだ。

・・・ごめんね？」

おいおいユ二さんや・・・

「いや、こつそり取り壊したって・・・

そんで何やってたの？」

「そ、それは・・・ちよつと秘密の開発をね？」

なにそれ！？

めっさ気になるんですけど!?

「何!? 何やってんの!?
見せて見せてー!?!」

「ううっ・・・」

・・・わかったよ・・・
見ても笑わないでね?

・・・あと、皆には秘密だよ?」

「了解だっぜ!」

そこは、かなり広い空間だった。

「こんな空間があるとは驚きじゃのう・・・」

「地下室ってこんなに広いのか!?!」

「うん。・・・まあここは結構拡張してるけどね。」

部屋の中は暗くてよく見えない。

そして、ユニが壁に設置されている何かに触れると、地下室の中を照明が照らし出す。

そこにあつたのは・・・

「なっ・・・なんじゃこりゃああああ!？」

・・・いくつかの、巨大な鎧のような機械の塊だった。

こっ……これはもしかして!?

「なあファイア!?

これって!?!?!」

「うむ……これは……ゴーレムか?」「そう。大昔の戦闘用ゴーレム。それも、搭乗タイプの。」

「……今では皆、『もつと戦闘に向いた効率的な形がある。人型なんてナンセンスだ。』とか言っで、使おうとする人なんていないし、開発する人もいないんだよね……」

でもね、ボクは『人型』であることにも何か意味があるんだと思うんだ。」

ぼわぼわしたかんじのユニが、いつになく饒舌だ。

そのことについて驚いていると、

「ご、ごめんね?

なんか変なこと言っで。」

「いや、ユニ。」

てことは、このゴーレムを研究して、新しいゴーレムを開発してるのか？」

「う、うん。

なかなか進まないんだけどね・・・。

でも、何時の日か完成した人型ゴーレムに乗って、練り歩くのが夢なんだ！」

なんだか目がキラキラしている

「ユニよ」

と、急に顔が曇り、

「な、なに？ やっぱり女の子らしくないよね？ 気持ち悪いよね？ ご、ごめんね？」

俺が言いたいのはそんな事ではない。

「『友』、と、呼ばせてもらっても良いかね？」

「・・・・・・・・へ？」

ユ二の言葉に、俺は感動していた。

「俺の世界にも、科学によって、人型の機械を造ろうとする奴らがいた。

・・・・・・・・でも、化学者達は口を揃えて、『あり得ない。非効率極まりない。実用的ではない。』の一点張りだ。
だが、俺は夢に見ていたんだ。

俺のいた世界に数多ある物語のように、巨大人型兵器に乗って練り歩くのを・・・

何時の日にか、そんな世界になる事を！

・・・まさかこんな所に同じような事を考えているやつがいるなんて思ってもみなかったけどな。」

実は俺のメカ好きも、このあたりからきている。

「・・・・・・・・エ、エイジ・・・・・・・・！」

・・・ガシッ！

俺はユニと手を取り合った。

「是非とも俺に協力させてくれ！！」

「うっ、うんっ！　そんな事言ってくれたのはエイジが初めてだよ！

あ、ありがとうっ！

こっちこそよろしくねっ！？」

「ああっ！　よろしくなっ！」

・・・と言って、ユニと見つめ合っていた。

・・・なんか照れるなコレ。

ユニは理解者が出来たのが嬉しいのか、顔が赤い。

「あ、あの・・・エイジ・・・その・・・手・・・／／／」

「おつとすまん。」

「・・・もう・・・エイジってばもしかして天然でやってるのかな？・・・」

「なんか言っただ？」

「なっ、なんにも言っていないよ!？」

「・・・なんだろう？
まあいいや。」

「・・・私、さっきから空気がしょわ・・・」

・・・なんか大精霊な短剣のフィアさんが、1人(?)さびしそうにしていた。

第九話 乙女秘密と夢物語（後書き）

はい、というわけで、作者の趣味が顔を覗かせましたね！

作中の主人公の夢は、作者の夢です。

何時の日か、人型メカに乗って練り歩くのは私の夢なんです。
別に兵器である必要はありませんが、それなりにハイスペックでなくてはイヤです。

ではまた近いうちに。

第十話 探偵なのか？それともエスパーなのか？（前書き）

PVが12000越えたよわーい！

さんくすみなさん！

では

第十話 探偵なのか？それともエスパーなのか？

地下室で友となった俺達は、学校へ行く準備をすることにした。

実はその学校もこの近くにあるそうで、泊まりの支度はしなくてもいいらしい。

何でも魔術が必修課目なので、何かしら杖などの武器が必要なのだそう。

集積魔術と詠唱魔術の両方があるらしい。

なので、集積魔術の為の武器などがないと、困る事もあるそう。

「なあファイア。」

「なんじゃ？」

「ファイアは昔、大魔導士だったんだろ？」

「その通りじゃ！」

「じゃあ、魔術のコツとか教えてくれよ。」

「ふむ・・・そうじゃのう・・・」

魔術、というモノはじゃな、すなわち空間を支配する術なのじゃ。」

「へ？　空間？」

なんじゃそら？

「うむ。　魔力によって空間を支配し、自分のいめーじ通りの現象を起こす。

世界を切り取り、自らがその世界の『神』となるのじゃ。

極めれば、『出来ない事は無い』とまで言われておる。

あとはただ自分の『いめーじ』を鮮明に投射できるかじゃな。

まあ『いめーじ』が大事って事じゃな。

ようは気合いじゃ！」

「な、なるほど。」

イメージと気合いか！

「ところで、集積魔術用の武器ってファイアでいいのか？」

「うむ。しかし、この短剣は戦闘には向かないのじゃ。」

「・・・そうじゃのう・・・あるじよ、武器を造ってみるか？」

「それは面白そうだ！

・・・でもそんな簡単に作れるのか？」

「私とあるじなら楽勝じゃ！
材料もここにあるしのう。」

「材料って・・・コレ？」

部屋の中に転がっていた、古びた両手剣を指す。

「それじゃ。」

では早速やってみるかう？」

「おう！

・・・でもどうやるんだ？」

「うむ。錬金魔術じゃ。

その内の彫金魔術というのを使う。
本来なら大きな設備が必要じゃが、私とあるじなら無くともそれ以上のモノができよう。」

「おお！ あの錬金術か！
・・・で、どうやるんだ？」

「うむ。ではまず、魔力でこの剣の空間を把握するのじゃ。
つまり、この剣の全てを理解するのじゃ。」

「りよ、了解。」

集中して、剣を見る。

剣の中にある『力』が理解できる。

錆びや欠け、傷や凹みが分かる。

それらより遥かに細かい、粒子の細かい・・・なんと云うのだろう
か・・・形の流れが解る。

「ほう！・・・自力でそこまでできるとは・・・
やるのうあるじよ。
ではいくぞ？」

・・・と、ファイアが言うと、剣が空中に浮かび上がった。

「おお・・・なんか無意味にスゲー・・・」

「んなことだーだって良いわ！
・・・そうしたらゆっくりと加熱するのじゃ。」

「いやんなこと言われても・・・
どうやんの？」

「『熱』をいめーじするんじゃ。」

熱ねえ・・・

まあやってみよう。

「ぬんッ!」

・・・いきなり剣が白熱して融けはじめた。

「す、すつつぶじゃ!

大体今ぐらいの勢いをきーぶするのじゃ!
微調整はこっちでやるのじゃ。」

「了解。」

とりあえず言われた通りにやってみる。

「うむ、それで良い。」

ところであるじよ。

・・・一つ試してみたい事があるのだが。」

「なんだ？」

「アダマンタイトを造ってみんか？」

「え？ 伝説の金属！？」

あれって作れるモンなの！？

てか実在すんの！？」

「いや、アダマンタイトの生成に成功した、という話は聞いたことがない。

アダマンタイトやオリハルコン、ミスリルと言った魔導金属は、霊脈付近で非常に稀に採取されるモノじゃ。

・・・それについて、私は一つの仮説を立てたのじゃ。

普通の金属が、金属結晶になる時に膨大なマナにさらされる事で魔導金属となるのではないかと。

私では力不足だったが、あるじの力ならば可能かもしれんぞ？」

あわててマナを戻し、勘で調整してみる。

次の瞬間、鉄がまばゆい光を放つ。

「・・・ほ、本当にうまくいくとは・・・
その状態を保ちながら、今のうちに自分のいめーじする武器の形に
作り込むのじゃ！」

「え!？」

「早くするのじゃ！
その間、マナ操作は私がさぼーとしておくのじゃ！」

ひたすら放出される英司のマナを、フィアが微調整していく。

「いや、武器って言っても・・・
ええい！ シンプルに日本刀だっ!！」

白熱した鉄を、まるで粘土のように練り上げる。

「やっぱり魔術って便利だな」

まるで幾度も折り重ねて圧縮したような多重構造を、魔力によって一瞬で造り出す。

この時英司は、つくりかけの刀の分子構造を直感的に全て把握していた。

・・・中心は粘りのある感じ、外側は硬い感じで・・・

・・・形を整えてつと・・・

「これでいい？」

「・・・びつくりじゃ・・・」

よもや初めてでこの完成度とは・・・

・・・しかし初めて見る武器じゃな・・・

片刃の曲刀のようじゃが、こんな構造は初めて見るぞ・・・」

クックック・・・

フィアめ、驚いているな？

「これが・・・これこそが！

和の国の技術にして芸術・・・

世界に誇る“漢”のロマンツ・・・」

日本刀だッ！

！！！」

・・・決まった・・・

・・・完璧に決まってしまった・・・

「・・・フーン」

うわっ ひどっ！？

「なんかリアクションくれたっていいじゃない！？」

「すごいすごい。びっくりなのじゃー。」

「わーい。」

・・・ぐすつ・・・

・・・ひどいや・・・

「わ、わかったからいじけるでない！・・・まったく・・・」

「それはさておき、これからどうすんの？」

「はあ・・・まったくこのあるじは・・・

うむ。では私の宝玉を嵌め込むすぺーすを造るのじゃ。

細かい所は私がやろう。」

「了解。・・・んじゃこの辺りに。」

刀の鐔のあたりに穴を開け、強度を保つために補強用のカバーを作った。

「・・・うむ。概ねこんなものじゃろつ。
改良したければ、また何時でもできるしのう。
・・・では、ゆっくり冷却するのじゃ。」

「了解。」

英司は直感的に分子レベルでの操作が出来るので、いちいち焼き入れ等をする必要が無いのだ。

最後に、フィアの宝玉を短剣から取り外し刀に嵌め込む。

「・・・完成じゃな。」

・・・しかし、こんな良質なアダマントタイトの剣など、値にしたら
国の財政がひっくり返るれべるじゃぞ・・・。」

「・・・そいつはスゲエ・・・
てかマズいんじゃないか・・・
コレが量産されたら、世界の相場とかが大変な感じにならないか？」

「うむ。　それに、戦力のばらんすも偏りそうじゃ。」

「・・・まあこんなもの、あるじにしか作れんじやろうから出どころだけ秘密にしておけばいいじやろう。」

先祖代々伝わる家宝とでも言えばよかろう。」

「なるほど。　んじゃ、これは極秘って事で。」

「うむ。」

ボタンッ！！（ドアが開く音）

「エイジ！　さっきマナが一気になくなっただけど何やってたの！？
・・・って、なにそれ？」

「うおっ！？」

「・・・あ、あー・・・　これはだな、先祖代々から伝わる・・・
「ってこれアダマントイト!?!」・・・家宝でな?」

「どういうこと?

「・・・召喚したわけじゃなさそうだし、この部屋にはそんなものな
かったし、もともとそんなもの持ってなかったし・・・
もしかして造ったの!?!」

「・・・」

何故わかる!?!

「造ったんだね?」

・・・早速バレた。

第十話 探偵なのか？それともエスパーなのか？（後書き）

とゆーわけで『はじめてのぶきづくり』編でした。

この小説の諸設定は、基本的に作者の思い付きですが、意図的にネタとしてリスペクトしている場合と、今までに蓄積した知識から無意識に引用している場合がございます。

ネタとして出す時には、わかる人にはわかるようにしてありますが、無意識の場合、さも自分で思い付いたかのように書いてあります。
・ ・ ・ たぶん。

だって無意識ですもん。

無意識のことなんてわかりませんもん。

ですので不快だったらこっそりメッセージください。
こっそり直します。

・・・でも異世界召喚主人公最強って時点でかぶりまくりな感じがしないでもない・・・

ではまた近いうちに

第十一話 刀ってかっこいいけど、正直振り回すの大変だよね（前書き）

短いです。

では。

第十一話 刀ってかっこいいけど、正直振り回すの大変だよな

さっそく造った刀、フィアードエッジ（命名・英司）を使ってみる
事にした。

英司は元の世界では一応、古武術をやっており、扱いは知っている。

現在英司たちは、再び演習場に来ていた。

「セイツー!!」

ズバァッ!!

・・・地面が割れた。

「威力はそこそこか。」

プラズマほど派手じゃないな。

「・・・いや、はんぱない威力だよ!？」

「うむ、振っただけでこれとは・・・
次は集積魔術をやってみようかのう。」

「了解。 マナを流し込めばいいのか？」

「うむ。 それを私が組んだ術式で刀身から発動するのじゃ。
どんな術式にするかはあらかじめ決めておいて、きーわーどで発動
するようにはしておけるぞ。」

「便利だな! どんながあるの？」

「詠唱魔術だと時間がかかるところを、わんたっちで発動させられるぞ。」

とは言っても、本体が刀なので離れた相手には斬撃をとばすぐらい

しかできんし、射撃系の魔術とは相性が悪いしのう。」

「・・・それビミョーじゃね?」

「使い手しだいじゃな。」

「んじゃ他にも武器造るか!

・・・でも全部持って歩くのもなー・・・」

「・・・こればかりは他に武器を作って私を嵌め込み直すしかないのう・・・」

・・・それじゃ時間がかかるな・・・

「なあファイア。」

「なんじゃ?」

「作って置いた武器をまとめてどこかにしまっておいて、使う時だけ召喚して組み合わせて・・・いや、直接フィアの周りに展開したらどうだろう。」

「てかそんな術式組める?」

「なるほど!」

「たしかにそれはいい考えじゃ!」

「問題ないぞ?」

「・・・そうじゃな、武器は異空間にでも収納しておけばよいのではないか?」

「普通は不可能じゃが、あるじなら朝飯前じゃな。」

「まじか!・・・クッククク・・・楽しくなってきたぜえっ!」

「・・・」

「なんだおまえら、その尊敬するような目は。」

「別に。」

「まあいいや。

さっそくいくつか術式試してみようぜ?」

「・・・そうじゃな。」

・・・その後、いくつかの術式を登録し、一応の完成を見た。

そして再び武器開発に勤しむために部屋へ戻るのだった。

今回からはユニも武器開発に参加することになった。

「さて、どんな武器が良いかな?」

「やっぱり万能な杖とか、遠距離な弓とかじゃないかな?」

「そうじゃな。 そのあたりが無難じゃな。」

「でも弓って扱いにくそうだな。
・・・そうだな・・・銃とかどうだろう?」

「ジユウってなに?」

「この世界には銃が無いのか!?」

「初耳じゃな。 それはなんじゃ?」

「俺の世界の、最も普及してる武器だ。
兵隊はみんな持っている。
剣や弓は、時代遅れになっているんだ。」

「け、剣や弓が時代遅れ！？
魔術も無いのに！？」

「わ、私も驚いたぞ！？
それは一体どんな武器なのじゃ！？」

「そうだな・・・この世界に大砲はあるのか？」

「それはあるけど・・・
あんまり使われないよ？
戦術魔法とかがあるから。」

「あれを手で持てるサイズまで小さくするんだ。
弓よりよく飛ぶし、簡単に当てやすい。
威力も高くて鎧とかじゃ防げない。
すごい速さで連射もできるし、弾こめも簡単だ。」

「そんなバカな！？」

「ほ、本当なのか！？」

「ああ。だから今の兵隊は鎧も着ない。」

「科学のみでそこまで行くとは……凄まじい世界じゃのう……」

「す、すごいね……」

「国を一発で吹き飛ばす兵器もあるしな。」

「……いくらなんでもそれはないよ……」

「いや、本当だ。」

だからその兵器で戦争すると、世界が滅亡してしまうので、条約でお互いにその兵器の使用を禁止してるんだ。」

「……想像を絶する物騒な兵器じゃな……」

「場合によつては何百年も毒を撒き散らすしな。」

「……とんでもない話を聞いてしまった気がするよ……」

「空を飛ぶ乗り物や、星まで行ける乗り物もあるぞ？」

「「うそオ!？」」

「いや本当に。」

庶民でも結構簡単に乗って旅行ができる。

まあ星まで行けるやつはまだ一般人は乗れないし、せいぜい月くらいまでしか行けないけどね。

音よりも速く飛ぶことができるのもたくさんある。」

「……一度行ってみたいなあ……」

「……そうじゃのう……」

しかしにわかには信じられん話じゃ……」

「まあ確かに便利だけだね・・・
でも魔術も無いしね。
物はあるけど、いろいろめんどくさい世界だよ。」

「そういうモノかのう？」

「それにしてもすごい話を聞いたよ・・・
・・・で、結局何の話だっけ？」

「おおそうだった。」

「・・・で、銃を造ったらって話だったな。
魔術で魔術の弾を撃つってのはどうだろう？」

「うむ。 多分可能じゃ。」

「取り敢えずそれはどんな仕組みなのじゃ？」

「うーん・・・そうだな・・・
今の銃は薬莢っていう小さな筒に、円錐形の弾と火薬、信管が入っ
てるんだ。」

「その薬莢の後ろから信管を叩くと火薬が爆発して弾を飛ばすんだ。」

・・・と、図に描いて説明する。

「まあこれに複雑な機構が付いて、秒間15発とか撃てたりするんだけど・・・さすがにその仕組みまでは知らない。」

「なるほどのう・・・」

「ああ、あと、必ずしも火薬で飛ばすわけでもないんだ。トリガーを引いたら攻撃が飛び出す手持ちサイズの武器はだいたいみんな銃って呼ばれてる。」

「ふむ・・・正直私にはよくわからないのじゃ・・・」

「じゃ基本的に俺が作るから必要な事・・・そうだな、杖や弓の事を教えてくれる？」

「うむ、了解じゃ。」

「ボクも手伝うよ！」

「ありがとう。 んじゃ2人ともよろしく！」

「うむ」「うん」

・・・そうしているうちに、いつの間にか夜はふけていくのだった。

第十一話 刀ってかっこいいけど、正直振り回すの大変だよね（後書き）

すぐに次更新します。

感想とかもらえると嬉しいです。

第十二話 俺はかつて武器職人と呼ばれた男（前書き）

はい、とゆうわけで、二話連続投稿です。

今回、とても読みづらい仕様となっており、メカ設定とか苦手な人は・・・頑張ってください。

・・・ウソですダメだったら飛ばしてください。

では。

第十二話 俺はかつて武器職人と呼ばれた男

結局、徹夜になってしまった。

「まさか徹夜になるとは・・・」

「・・・いや、一晩で出来た事の方が驚きだよ・・・」

「まったくじゃ・・・」

ユニたちの突っ込みにもキレが無い。

出来たのは、対物狙撃ライフルのような大型のものが一挺。
オートマチック拳銃に、プルバップ式のマガジンが着いたような、
マシンピストルが二挺。

徹底的に凝った造りとなった。

ユニの部屋に転がっていた古い魔導クリスタルをアダマントイトと

同じ要領で精製し直し最高品質に高めたモノと、これまたユニの部屋に転がっていた鉄から精製したアダマントタイトを組み合わせ、三人の総力を結集して『マナ・コンデンサ』を開発した。

これにより、溜め込んだマナを一気に放出し、術式により収束、銃底の反発術式とアダマントタイト製のバレルに刻まれた加速術式により射出する。

仕組みとしてはレールガンに似ている。

また、魔石や魔導クリスタルによる炸裂弾などの特殊弾頭、アダマントタイト製の装弾筒付き徹甲弾などの実体弾を射出する事も可能である。

実体弾は、異空間に収納されており、マガジン内部に自動的に転送される。

その為リロードは必要無いが、弾種交換の為にマガジンを交換する必要がある。

術式により、弾頭に標的を追尾させる事も出来るが、弾速が速いためコントロールが難しく、狙撃した方が扱いやすい。また、ロックオンした標的を自動的に追尾する術式も思い付いたけど、今回は実装していない。

対物狙撃ライフルの方は、大口径で高威力の術式や実体弾で、高精度な精密射撃が可能になっている。

大型のコンデンサを搭載しており、チャージショットも可能だ。

マシンピストルは、比較的小口径で、高い操作性と連射速度を誇る。どちらかというとサブマシンガンに近いが、マガジンがグリップの

後ろにあり銃身が短い為、より小回りがきく仕様になっている。

この二挺のマシンピストルは二挺拳銃用でセットになっており、右手用のマシンピストルにファイアが、左手用のマシンピストルにはリンク用の魔導クリスタルが嵌め込まれている。

マシンピストルと対物狙撃ライフル、日本刀のグリップは共通しており、術式により変形する事で各武装とジョイントする。

つまり、手に持ったまま武装の変更が一瞬でできる。

・・・我ながら凄まじいモノを作ってしまった。

「クッククク・・・まったく、自分の才能が恐ろしいぜ！」

「・・・うん、いろんな意味で恐ろしいよね・・・」

「まったくじゃな・・・」

「・・・なんだおまえら。」

「別に。」

・・・なんかこのやり取りお決まりになってきた。

「じゃあボクはもう疲れたから休むよ・・・おやすみエイジ。」

「おう。 ありがとう！
おやすみ。」

「おやすみー・・・」

「私も疲れたのう・・・」

「俺も・・・
そろそろ少し休もう・・・
・・・おやすみ。」

「うむ、おやすみなのだじゃ。」

こうして英司は異世界で初めての夜を徹夜で潰し、朝っぱらから泥のように眠って過ごすのだった。

第十二話 俺はかつて武器職人と呼ばれた男（後書き）

というわけで、作者の趣味が出てます。

・・・かつこいいなーとか思ってたんですが、別にミリタリーに詳しくいわけではないので、うる覚えと思い付きで書いています。
なんかおかしいところとか設定とかがあつたら、こっそりメッセージください。

ではまた近いうちに。

第十三話 闘いの基本は格闘だ（前書き）

さんざん遅くなったあげく短いです。

すみません。

では

第十三話 闘いの基本は格闘だ

・・・俺は今、苦しんでいる。

何かが俺の上に重苦しくのし掛かり、押し潰そうとする。

お前は何者だ！

何故にこんな事をする！？

『名前など無い・・・お前と同じだ・・・』

機器人忍者の人ですか！？

『俺達は政府や誰かの道具じゃない・・・』

いや、それは潰されてる俺のセリフだ！

ザンジバーランドMGS！

フォックスハウンドCIA！
フォックスハウンドCIA！・・・

「はっ！？」

そこは知らない天井だった。

あ、そういえば異世界来てたんだった。

でも敢えてもう一度。

「知らない天井だ・・・」

・・・なんだかとても変な夢をみていた気がする・・・

なんだか本当に体が重い。

・・・まさかこれが金縛り！？

キヤーどうしましょもしかして心霊現象初体験！？

・・・あ、そういえばフィアって死んでたっけ・・・

とりあえず苦しいお腹のあたりを見る。

「ッ!？」

な、なにゆえ!？

そこにはなぜか皇女殿下の頭が乗っかっていた。

ベッドの横にひざまずくように寄りかかり、俺のお腹を枕にして眠っている。

「いったいなぜ!？」

「・・・うん・・・」

・・・あ、おはようございますエイジひゃああ・・・くふう」

「お、おはようございます?。」

・・・あくびか挨拶かどっちかにしていただきたい・・・

・・・いやそうではなくて！

「いや起きてください。」

「・・・すぴよー・・・」

しかたがない。

「フンぬ！」

力を込めて腹筋を跳ねさせた。

「ふわっ！？

なにこつ！？」

起きたか。

「おはようございます。

皇女殿下が何故ここに？」

「私の事はルセリナ、もしくはリナと呼んで下さい！」

「リナおはよー！」

これでいいの？

「おはようございます！」

今日から学校ですので朝のご挨拶に来ました！」

よかったらしい。

「ああ、そういえば今日から学校だっけ・・・」

「はい！」

・・・コンコン

「エイジー？ 今日から学校だよー？『ガチャ』って皇女殿下！？」

「あ、ユニさん。おはようございます。」

「おはよーユニ。」

「・・・あ、うん。おはようございます。
・・・何事？」

「俺もわからん。」

「私もです。」

「「え!？」」

その場にいる全員が理解していないようだ。

「ところでお腹が減ったのだが。」

「あ、そうだね。ここには食堂もあるからそこで食べよう。」

「あ、いいですね！
私も行きます！」

・・・いいのか皇女殿下。

食堂に行き、朝食を食べる。

三人で座っていると、周りの人がとても居心地悪そうにしていたの

で、やはり皇女殿下がここに来るのは珍しいのだろっ。

メニューはパンのようなものがメインのようだ。
それほど変わったものはなかったが、微妙に違う。

それなりにおいしかった。

その後、一旦リナとわかれ、部屋に戻って準備をした。

・・・そしてついに、初登校の時がやってきた。

第十三話 闘いの基本は格闘だ（後書き）

はい、これから学園編です。

ではまた近いうちに

第十四話 いやもちろんワザとだけどね？（前書き）

遅くなってすいません。

話がい付かなかったんです。

では

第十四話 いやもちろんワザとだけだね？

学校は歩いて十分もかからないところにあつた。

話によると、大学のようなところのようだ。

制服とかは無いらしい。

ちなみに今の俺の服装は、ブレザーのような服だ。

ユニたちが用意してくれたらしい。

かっこいいけど若干うごきづらい。

フィアはライトセイバーみたいな柄だけの待機形態でポケットに入っている。

この世界に来た時のＴシャツとジーンズは目立つのでしまつてある。

ユニはうごきやすそうなワンピース（？）のようなものにジャケット、ズボン、ブーツ、そして小さなビンなどを収納できるホルダーやポシェット付きのベルトをして、手には機械じみた長い杖を持っている。

魔法少女と錬金術士を足して2で割つたようなかんじ。

なにこれかつこいい。

ちなみにリナの服装は意外に普通だ。

目立たないけどどこことなく上品なかんじ。

長袖な上にひざだけのスカートだった。

・・・俺も服ぐらい自分で金稼いで買おう・・・

校門をくぐると、登校してくる生徒でごったがえしている。

やはりこのメンバーは目立つのだろう。

大勢の生徒達が、遠くからこっちを見ている。

2人はかなり目立つ容姿だからな。

あとは、黒髪黒目が珍しいのだろうか？

すると、取り巻きを連れた一人の生徒がやってきた。
なんかいけすかないイケメン野郎だな。
そしてどこことなく小物臭がする。

「これはこれはルセリナ皇女殿下、ご機嫌麗しゅう。
私、ザイル・ロスフェラと申します。
以後、お見知りおきを。」

と、言ったのを皮切りに、周囲の人間が、我先に挨拶を始めた。

・・・いやさかし・・・なっがいな・・・

リナもイヤそうな顔をしている。

・・・しょうがない・・・

「なあリナ、そろそろ行かないとマズいんじゃない？
と、声をかける。」

「え、ええ！　そうですねっ！」

なにこのめっさ嬉しそうな顔。

挨拶攻めがそんなにイヤだったんだろうか。

気持ちはわからんでもない。

すると、周りが一斉に睨んできた。

「？」

なんだ？

「なんとゆう呼び方を・・・」

とか

「無礼な！」

とかいう声が聞こえてくる。

しょうがないじゃん本人にそう呼べって言われたんだから。

するとさっきのイケメン野郎が、

「きみ、今僕達が殿下にご挨拶申し上げているんだ！」

邪魔をしないでくれ！

・・・殿下、このような下賤な者を身の回りに置くと、よからぬ誤解を招きますよ？」

・・・この野郎・・・絵に描いたようないけすかないキャラだな。
とりあえず無視だな。

「行こうぜリナ・・・リナ？」

返事が無い。
ただのルセリナのような。
どうした？

・・・ズゴゴゴゴゴゴゴ！

・・・間違えた。
ルセリナではなく鬼のようだ。
なんかめっちゃ怖い。

「・・・謝りなさい。」

「は？　今なんと？」

「そ、そうだよ、エイジに謝って！」

「・・・ユニ、お前もか・・・」

ぶつちゃけ超はずい。

軽く現実逃避するぐらいに。

「うるさい！　触るな魔眼持ちめ！　気味が悪い！」

「・・・このクソが・・・」

「あーっ、足が滑ったー!」

と、言いつつクソの顔めがけて跳び蹴りを放つ。

メキヨツ!!

つとイイ音をさせて吹き飛ばすクソ。

「すまん、ワザとじゃないぞ?」

「き、貴様ツ!?!」

おお、みごとな靴の跡だ。

「ぷークスクス。

すまんなクソ。

すまん、クソに失礼だったな。

肥料として役に立つもんな。

うん、カスだな。

形骸である。

敢えて言おう！

カスであると！

すまんカス。」

「かつ！？・・・きッ！・・・貴様ッ！？」

「なんだカス。」

「ふ、ふざけるなよ貴様！

この僕を侮辱した上に足蹴にするだと！？

僕を誰だと思っている！？」

・・・うわぁ・・・

「セリフにもひねりが無いな。
所詮カスか。」

「ッ……ッ、ッ」

なんだコイツ鶏だったのか？
いや鶏に失礼ry

「こけこっこー？」

「殺してやる！」

「来てみる……ハエども（ものすごいバカにした声で）
たびたびすまん、ハエに失礼だったな。（真面目な声で）」

「しッ、死ねエエッ！」

叫びつつ、腰にさげていたレイピアを抜いて跳びかかってきた。

「ほいっど。」

素早く手を捌き、足をかけて投げ飛ばした。

カスはひっくり返って背中から地面に落ちた。

「がッ！？ く、くそッ！」

よし、今のうちだ。

「行こうぜ！」

ほつけた顔をしている2人の手を取り走る。

「ま、まて！」

しつこいやツだ。

てか待てと言われて待つやつがいるかっての。

「あばよーとつつあーん！」

・・・までーいルパーン！

とは言ってくれなかった。

うむ、当たり前か。

第十四話 いやもちろんワザとだけどね？（後書き）

また少し時間がかかるかも・・・

ではまた。

第十五話 そんな装備で大丈夫か？（前書き）

す い ま せ ん で し た ー ！

！（土下座AA略）

まじすいません。

色々な事件が連続で起こり、かつ話が思いつかなかったんです！（本当）

・・・すいませんゴメンなさいお気に入りから削除は止めたげてー！！

というわけで久々の更新です。

・・・今まで読んでくださった方、ありがとうございますそしてゴメンなさい！

まだ連載始めてからそんなに長くないので、話を忘れてしまった方は最初から読んでくださるとよいかと。（作者も忘れてました。）

そして今回初めて読んでくださる方もありがとうございます！

不定期ですが、よかったらお気に入り登録したあげくポイント入れ

たすえ感想くださると嬉しいです！

では

第十五話 そんな装備で大丈夫か？

カスを振り切った英司達は教室へと向かう。

「エイジさん、さっきはどうしたんですか？
いくらなんでもやり過ぎですよ？」

しかし英司は不満のようだ。

「・・・ついカツとなってやった。
今は反省している。
でも、後悔はしていない。」

「・・・なんですかそのどこかで聞いたようなフレーズは？・・・」

「そつだよエイジ、いくらなんでもやり過ぎだよ？」

「・・・だつて・・・ユニはなににも悪くないのに『きもちわるい』とか『触るな』とか言つんだもん・・・」

「えっ!？」

英司はユニが貶されたのが気に入らなかったようだ。

「えへへ、ありがと、エイジ」

「むう・・・」

ユニはなにやらニヤけている。

逆にリナは不満そうだった。

そんなことを話しながら、英司達は学校へ向かって行った。

•

•

•

•

あれから一週間がたった。

英司もやつと学園に慣れてきた。

授業は、自分の希望する講座を自由に選ぶことができる。

席も自由だ。

年齢制限は十二歳以上で、少ないが社会人も来る。

魔術や武術の講座だけでなくありとあらゆる科目があり、そのなかから自分に必要なものを選ぶのだ。

イメージとしては大学に近い。

英司は魔術、武術、魔導機械についてを基本に学ぶことにした。今は学校の教室と技術室、城の地下室を行き来して魔導機械兵器の開発に勤しんでいる。

今まで、魔導機械を手持ちサイズに搭載した武器はほとんどなかったそうだ。

明日からは魔術戦闘や武術などの実技系の授業が始まる。

英司は、この一週間で改良を重ねた武器のチェックに余念がなかった。

『主よ、そんなモノなくともお主なら楽勝じゃろくに・・・
というか私なんぞがいなくともじゅうぶんじゃ。』

「ファイア、その油断が命取りだ。

以前、拾ったスクーター2台をバラして作ったハイマニューバスーツでいきなり60キロ出したら左足だけエンジントラブル起こしてな。

あの時はホント、どうしようかと思ったよ。」

『・・・サッパリわからん・・・』

「それに、ファイアがいてくれると心強い。」

『そ、そうか。
ならばいい……。』

「うん。

まあさすがに疲れた。
もう寝るよ。

おやすみフィア。」

『うむ。おやすみ主よ』

翌日

今日はついに魔術戦闘の授業の実技が始まる。

英司達は今、学園の演習場に来ていた。

「おうエイジ、ついに実技だな！」

話しかけてきたのはこの一週間で知り合いになった、イゴールワ
イズナー！。

「ふっ・・・見せてもらおうか、イゴールの拳の性能とやらを！」

「いや俺の武器は剣だから」

「さいですか。」

などと話していると、一人の女子生徒が話し掛けてきた。

「少年、君があのでエイジ君か？」

・・・なにこの人カッコいい。

てか“あの”ってなんやねん？

「はあ、そうですが？」

「私はアリシア。
アリシア ヴァーステインだ。
よろしく。」

「えっと、大神 英司です。
こちらこそよろしく。」

「うむ。君とは一度、手合わせして見たかった。
ではまた後ほど。」

・・・と言つと、さっ・・・と居なくなってしまった。

「なんだっ たんだろ？」

「お、おい、今のは魔導騎士団の副団長じゃねーか！

お前いたいなにやっただよ!？」

なるほど、あれだけ騒ぎになったのだから騎士団の偉い人なら知っていてもおかしくない。

「いや、まあ色々と・・・」

事情を知っているユニとルセリナが横で苦笑いしている。

「てかなんでそんな人がここにいるのさ？」

「色々つてお前・・・」

そりゃあの人まだ18だし、この学園はあらゆる分野のトップが集まるからな、そうゆう人も多いんだ。」

「・・・お前くわしいな。」

「そりゃ有名だからな。」

『魔導騎士団の戦女神』とまで呼ばれているんだぞ。ファンも多い。」

「・・・ふーん・・・」

・・・なんとゆう厨二ネーム。

「そっぴゃお前、この授業は初めてだっけ？」

「おうよ。」

「じゃあとりあえず実力見られることになるな。気合い入れてけよ？」

「頑張つて下さいね！」

「頑張つてねエイジ。」

ふ、ここまで言われては応えねばなるまい！

「大丈夫だ。問題無い。」

「よしお前ら、授業始めるぞー。」

前に出てきた教師が、気だるげな声をあげる。

おお、始まったな！

ついに俺が改良に改良を重ねた相棒が火を吹くぜ！

「とりあえず模擬戦闘するぞー。」

・・・っと今日は初めてのやつが居るんだっとな？
エイジ オオガミはいるか？」

どうやら出番のようだ。

「呼んだかね？」

「・・・ああ。

呼んだぞ。

・・・まあいい。

どんな魔術が使える？」

「だいたい使える。」

「それじゃわからん。

・・・なんか一番強いのをあの標的に撃ってみろ。」

「触媒は？」

「使ってもいいぞ。」

ちなみに、触媒とは詠唱魔法の時に使う補助具となる、杖や武器などのアイテムのことだ。

そのアイテムにそつた使い方になるため使用方法が制限されるが、その分マナの変換効率や操作性が上がる。

モノによつては誰でも無詠唱で使えるのもあるとか。

いやしかし・・・本気でやると校庭が吹き飛びかねんですが。

・・・さすがにマズいかなー・・・

・・・まあ適当にやってみるか。

吹き飛ばない程度に。

「んじゃ行きます！」

フィア、【ライティア】。」

『了解じゃ。ハンディフォーム！』

今は右手の腕輪になっているフィアが応える。

腕輪が形を変え、黒いグローブが右手を包む。

そして手のひらにはいつの間にかマシンピストルが握られていた。

「なっ！？

なんだそれは！？」

なにやら周りが騒がしい。

なんだか予想以上のリアクションだ。

「秘密です。」

「どこで手に入れたんだ？」

「自分で造りました。」

嘘は言っていない。

召喚された時に召喚用魔方陣からくすねたと言えないし。

「一体どんな仕組みなんだ？・・・」

「秘密です。」

まあ異空間から出ただけなんだが。

手の内は隠しておくに限る。

「んじゃ、気を取り直して・・・
行きます！」

フィア、【プラズマバレット】！」

右手用の魔導機械拳銃、【ライティア】を片手で構える。

『すたんばい れでいじゃ!』

うむ、ちゃんと教えた通りに覚えているな!

よし、派手目に詠唱ありでいくか。

「ギシュッ」

銃身の側面が小さく展開し、エアインテークが口を開ける。

作動も問題無しだ。

テンション上がってキターっ!!

「風よ、炎よ、雷よ! いかずち 集え、集え、集いて狂い、敵を撃て!
其は荒振る光の弾丸! 【プラズマ バレット】!」

余談だが実はこれの上位魔術に、万物を穿つ光の弾丸【ライトニング バレット】がある。

出力が高過ぎて、プラズマどころかビームが迸る恐るべき戦術級魔術だ。

これだと、校庭どころか文字通り射線上の万物を殲滅しかねない。

「ドッゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオ」

．．．．．や　　っ　　ち　　ま　　っ　　た　　！

．．．つい現実逃避してしまった。

「ジャキュツ．．．バシユウウウ．．．」

スライドが作動、バレルがせりだして、冷却機構が作動し、マズルのあたりから十字に蒸気が噴き出す。

さすがに射線上をどこまでも．．．とはならなかったけど．．．標的は完全に消滅し、その後ろの壁の役割を果たしていた丘を吹き飛ばし学園の裏山を削っていた。

．．．直前にテンション上げたのがマズかったかな．．．

これかもしアンチマテリアルライフル型の【デストラクト ランサ
ー】とかで、上位魔術使ってたらと思うと・・・

大陸がすっぱりと・・・

・・・いやいやまさかね？

「うわあああっ！？」

「きゃあああっ！？」

「ば、ばかなあっ！？」

ええい、皆の者、うるたえるでない！

「ゴメン、ミスった。

・・・テヘ」

「「「「うおおおおい！」「」「」」

「・・・たしかに一番強いのをやれと言ったが・・・限度があるだろ！？」

「・・・すいません実はまだ全力じゃないんです。

「・・・正直すまんかった。」

「・・・ああ。とりあえずその魔術は使用禁止だ。」

「了解です。

俺もこれを授業で使う度胸無いです。

「・・・さて・・・えっと、どうしましょう？」

「うむ。誰かコイツと模擬戦闘するやつはいない・・・か？・・・私がやるう。」
「いないよな・・・ってなにイっ！？」

あ、さっきの人だ。

「えっと、アリシアさん、だっけ？」

「うむ。是非とも手合わせ願いたい。」

あー……先生が困った顔してる……

「……お互いに殺傷力の高い攻撃は禁止だ。
あと広範囲を殲滅するようなものなしだ。
いいな!？」

え？ いいの!？

授業止めないの!？

死ななきゃいいの!？

凄い授業だな……

まあいい!

「そんじゃアリシアさん、よろしくお願いします。」

「うむ、こちらこそ。」

「ルールは説明した通りだ、いいな!？」

「・・・では、始め!!」

第十五話 そんな装備で大丈夫か？（後書き）

ではまた近いうちに

・・・とかいつて前回めっさ間空いたんでしたねすいません・・・

第十六話 空が私に力を与えてくれるのだ！（前書き）

というわけで前回よりは早めに投稿出来たぜ！

・・・すみませんそれでも遅いつすねすみません。

では！

第十六話 空が私に力を与えてくれるのだ！

「ルールは説明した通りだ！・・・いいな？
・・・では・・・始め！！」

とりあえず挨拶だ！

「では、大神 英司、参る！」

「アリシア ヴァーステイン、参る！」

アリシアさんが、少し離れたところから叫び返してくれる。
律儀な人だな。

アリシアは、鮮やかなベージュに輝く髪を頭の上の方で一つにくくったポニーテールにしている。
ボーカルなアンドロイドのツインテ、もしくはダンスに定評のあるボヤキなアンドロイドみたいなとても長くてたっぷりとしたポニーテールだ。

胸当てと籠手、ブーツを履いて、左手に大楯、右手に大剣を持ち、左腰にはサーベル、後ろに短剣をさしている。大剣の柄頭は平べったいカウンターウェイトのようになっており、小脇に抱えているので、まるで突撃槍ランスのようだ。どちらにせよ細身のアリシアには似合わない重装備だが、アリシアはそれをまるで片手剣と円楯ラウンドシールドのように扱える。大きな魔力による肉体強化と補助があつて初めてなせる技だ。

一方英司は、武器は拳銃、丈夫そうな裾の長い黒いジャケット、裾に切れ込みが入った黒いズボン、その切れ込みの中から黒いブーツが少し顔を覗かせている……という、軽装だ。ていうかおまえ葬式かつ！……って言いたくなるような黒装束だが、黒髪黒目にとてもマッチしていた。

さて、ついに実戦だ！
まずは試しだな……

「【レフティア】！」

『 トゥーハンドフォーム せつとあつぶじゃ！ 』

ファイアが応えると左手にもグローブが展開され、掌には右手の【ライティア】と対になる魔導機械拳銃、【レフティア】が握られる。

「【スタン バレット】！」

ファイアに向かって術式を指定する。

『せつとあつぷ!』

ファイアが応え、両手に握った銃のグリップの根元に埋め込まれた制御用魔導クリスタルと同期して術式を起動する。

空気の塊に電気を纏わせて打ち出す否致死性の魔術だ。

身体が痺れしばらく動けない程度の電圧と、思い切り殴られる程度の衝撃で敵を無力化する。

触媒となる銃弾を必要としない、すなわちマナを流してトリガーを引きさえすれば発動するお手軽な術式だ。

・・・とは言っても、この世界に電気系の魔術を扱える者などほとんどいないのだが。

まずはセミオートだ!

左右のトリガーを交互に引いて連続で打ち出す。

「バシュン!バシュン!バシュン!バシュン!」

圧搾空気が炸裂するくぐもった音を響かせ、電気を纏った空気の銃弾がアリシアに襲い掛かる。

「ッ！？・・・我を運ぶ風の加護！」

対するアリシアは、風を身に纏い高速移動する強化魔術を使った。
見事な短縮詠唱だ。

見た目では英司の攻撃の効果が解らないので、防御よりも回避をとったのだ。

肉体強化の魔術と併用した回避制動は見事な物だった。

魔術詠唱をこなしながら、肉体強化のみで二発を右ステップで回避、次の瞬間発動した魔術により急激に逆方向へスライドし三、四発目をやりすごしたのだ。

「詠唱無しで連射が可能だとは・・・
そんな魔術は初めて見たぞ！」

アリシアは驚愕していた。

大抵の攻撃系射出タイプの魔術は、一行から数行の詠唱もしくは暗唱の後に一発、というのが普通だ。

人間が扱える魔力、一度に放出できるマナの総量、制御できる総量、マナの変換効率を考えるとそのくらいが一番効率がいいのだ。

最初に術式名を宣言したら、後は撃ち放題なんて魔術は見たことも聞いたこともなかった。「いやなるほど、身に纏うつてのもあるのか。」

・・・カッコいいな・・・」

「かッ！？」

・・・そ、そうか？」

「ああ。参考にさせてもらっぜ！」

そんな会話を交わしながらも、アリシアはジグザグな軌道を描いて急速に距離を詰めて行く。

英司は自然体で構えながら狙いをつける。

「そこだッ！」

「バシュン！バシュン！」

これ以上ないタイミングで放たれたかに思えた。

・・・しかしアリシアは、直前で思い切り地面を踏み抜いた。

「我を囲え大地の守護！」

「ゴガッ！！」

轟音を立てて足下が陥没し、その周囲から岩盤が飛び出すように立ち上がる。

放たれた銃弾は岩盤を浅く削ると霧散してしまった。

アリシアの姿は、つきだした岩盤と砂ぼこりで完全に覆い隠されてしまった。

「チイッ！ 何処に行った！？」

バトルな空気のせいでテンションがおかしい。

「・・・このまま行けば死亡フラグだな。
しかし！ この状況を打破してみせてこそ漢おとこというモノ！」

先ほど見たアリシアの風魔術を参考に、アレンジを加えてイメージをまとめる。

・・・風よ、炎よ、雷いかずちよ！ 集え、集え、集い狂いて我に従え！
其は荒振る光の翼！・・・

「プラズマ ウィングー！」

英司の背中から、ごうごうと噴射音を響かせて光の翼が噴き出すように現れる。

足の周りにも凄まじいエネルギーが渦巻いており、時折翼と同じようにプラズマを散らす。

光の翼発動の余波で砂ぼこりを吹き散らし、空中に舞い上がる。

「空はいいぞ・・・空はいい・・・」

まさか生身の体で空を飛べる日が来ようとは思わなかった・・・

アリシアは岩盤の陰に身を隠しながら、相変わらず驚愕していた。

光の翼・・・

またもや見たことのない魔術だ。

まったく、驚かせてくれる。

【風の加護】だと、一時的に身体を跳ばしたり動きを補助したりするのが精一杯だというのに・・・

エイジ オオガミ・・・か。

不思議な男だ。

・・・それにしてもなんという光景だろうか。

黒衣に漆黒の髪と目、そして光の翼・・・
まるで天使か悪魔のようだ。

いや、堕天使か魔王が妥当かもしれん。

・・・はっ！？

いかにいかに！

見とれている場合ではなかった！

例え彼が天使であろうと悪魔であろうと、強い敵なればそれを糧^{かて}にして前に進まねばならんのだからな！

アリシアは身を隠したまま、静かに詠唱を初めた。

「砂子よ、風よ、集え、怒れ、逆巻け、穿て、其は突き立つ大地の大槍！」

アリシアの周りの砂が盛り上がると、それを風が巻き上げる。

その過程で砂はいくつもの塊となり、形を変えて石の杭となる。

そしてアリシアの周りに並んだ無数の杭が、一斉に飛び出していく。

エイジは5mほどの高さから地殻変動を起こした演習場を眺めていた。

その時唐突に、壁のようにそびえ立っていた岩盤を突き破り、無数

の石杭が襲い掛かってきた。

エイジは、咄嗟に光の翼を吹かして回避する。

ブラズマが煌めいて、まるで羽ばたいているように見えた。

そして次の瞬間、エイジの死角にあった壁を突き破り、アリシアが襲い掛かる。

大楯を構え、大剣を小脇に抱えての突撃。

エイジは一瞬で体制を建て直し、左手の拳銃を投げつける。

それを大楯で弾き、アリシアが猛然と距離を詰める。

エイジは瞬時に右手の拳銃を解除、グリップを変形させると、刀の刃を召喚、グリップの中空部分にダイレクトに現れる。

大剣の先端を捌き、受け流す。

それでもアリシアは止まらない。

そのまま突っ込むと、大楯によるタックルを繰り出す。

エイジはそれに掌底を合わせて威力を殺すと、光の翼を吹かしてそのまま横に身体を逸らす。

アリシアはそのまま上空に飛び上がると、風魔術で身体をひねり方向転換、加速しながら大剣を大上段に振りかぶり急襲する。

エイジも空中で停止すると、いつの間にか左手に召喚した鞘に刀を

納め、居合い抜き構えで正面から迎え撃つ。

振り下ろされる大剣。

それをアダマントタイト製の刀で以て切り裂く。

大剣が半ばほどで切り飛ばされる。

返す刀でアリシアを打とうとするが、アリシアは咄嗟に大剣を手放すと、スピードに乗る前の手元を大楯で押さえつけて止める。

その大楯を、プラズマを纏った拳で殴り飛ばそうとするが、バチン！という音と共に重さが消える。

アリシアの大楯は、ワンタッチで外せるようになっていた。そしてその内側に小さな楯が付いていたのだ。

大楯を咄にして死角からアリシアが腰のサーベルを抜いて襲い掛かる。

負けじとエイジが迎え撃つ。

「「殺^とった！！」」

第十六話 空が私に力を与えてくれるのだ！（後書き）

「プラズマ ウィング」はセーフでしょうか？・・・

別に孔雀の羽根みたいな形してるわけじゃないし単純な名前なのでセーフですよ！？

ではまた近いうちに

第十七話　今更ながら何故に（前書き）

今まで読んでくれた皆さま、お元気ですか？

私は一応生きてます。

私の居たところは、特に被害もありませんでした。

・・・では、なぜ今まで更新しなかったか、というと、いつものように話が思い付かなかったからです。

す　い　ま　せ　ん　で　し　た　！！

これからも見捨てないでいただけたら幸いです。

前回までのお話を覚えてない方も多いと思うので、最初から読んで・・・というのは前回やってしまったので、あらすじをかきませう。

英司は、騎士団の副団長、アリシアと邂逅する。

教師「それでは、ガソダムファイトオツ！　　　レディイイツ　　ゴ
オオオオ！！」

アリシア「天に竹林！　地に少林寺！

眼にももの見せるオ！ 最終秘弾！！

真・流星胡蝶剣！」

英司「俺のこの手が真っ赤に燃えるウ！」

アリシア「勝利を掴めと輝き叫ぶウ！」

英司「爆熱！ ゴオオオオツド フィンガアアアアアアア！」

英司・アリシア

「「おおおおおおおおおッ！！！！！」」

・・・八割がたウソです。

やってみたかったので。

ちなみに、このあとの本編に繋がるネタがこっそり仕込んであります。

では

第十七話　　今更ながら何故に

「そこまでえッ！」

演習場に教師の声が響き渡った。

「・・・・・・・・」

誰もが無言だった。

英司の放った居合いはサーベルを斬り飛ばしてアリシアの首筋に突き付けられていた。

しかし、勝利したわけではない。

英司の首筋には、アリシアのポニーテール・・・その中に隠された刃が突き付けられていた。

「この試合、引き分け！」

再び教師の声が木霊する。

「「「「おおおお！！」「」「」

生徒達からは歓声が上がった。

「俺の負けだ。最後のやつは読みきれなかった。」

「いや、私の負けだ。最初から相打ち狙いなど、負けたようなものだ。」

「いや、目的を果たしたアリシアさん、いや、アリシア姐さんの勝ちだ！」

「ね、ねえさっ！？

い、いやだから私は本来負けだったのだ！」

「完全に不意を突かれた俺の負けだよ姐さん！」

「さ、さつきからなんなのだ！？　その“姐さん”というのは！？」

「え？　“お姉ちゃん”の方が良かった？」

「お姉ちゃっ！？」

「さあ、どっち！？」

英司がたたみかける。

「・・・お、お姉ちゃん”で！（キリッ）」

「・・・なん・・・だと？」

ま、まさかそつちを取るとは・・・
・・・しかたがない・・・

「お、お姉ちゃ・・・」

アリシアがどこか期待のこもった潤んだ瞳で見つめてきているような気がする。

「・・・すいませんさすがの俺も恥ずかしいので、間を取って“姉

さん”で。」

「……………」

・・・なんかアリシアが残念そうな目をしていたような気がしたが、恐らく気のせいだろう。

「じゃ、引き分けてことで。」

「ああ、そうだな。」

その後、ようやく和解(?)した英司とアリシアだった。

「それにしても驚いた。

力で押してくるのかと思ったら変幻自在なんだから。」

「それはこっちのセリフだ。

空は飛ぶわ連射するわで見たことも聞いたこともない魔術の連続じゃないか。オマケになんだその不思議な剣は。

私の大剣とサーベルをいともたやすく・・・
それなりに高級品なのだぞ？
少し見せてくれないか？」

どうしよう・・・

さすがにアダマントタイト製の刀をあんまり見せるわけにもいかんし・
・

「その漆黒の光沢、アダマントタイト製とみた!!」

バレていらつしやる!？」

しかたがない・・・

「できれば秘密にして欲しい。
・・・少しだけだよ？」

「ほう・・・これは!？」

国宝級・・・

へたをすればそれ以上だぞ!？」

「へっへーん、いーだろー?」

「いーなあ・・・すごいなあー。」

なんか目がキラキラしている。

自分の作った物をこれだけ素直にほめられると結構嬉しい。

「お詫びと言ってはなんだけど、大剣とサーベルを修理、改造してあげよう！」

「・・・そんな事出来るのか？」

「フッ、皇帝陛下もびっくりの超兵器になるぜ!？」

「フフッ、では楽しみにしていよう。」

「ああ、重さのバランスはこれと同じくらいがいい?。」

「うむ。」

「よし、了解だぜ姉さん！」

「ああ、頼んだ・・・!？」

待て、そういえば何で私が“姉さん”と呼ばれねばなんのだ!？」

「ところでその髪の毛どうやって動かしてるの？」

「こ、これか？」

髪の毛は魔導効率が良いからな、簡単に出来るぞ？」

「へえ？知らなかった。

姉さんすごいな！。」

「そ、そうか？」

・・・あれでごまかせるなんて・・・

姉さん意外と単純だな・・・

「そういえばさあ、なんでみんな戦い方や武器の使い方なんて学んだりしてんの？」

戦争でもすんの？」

「」「」「は？」「」「」

話を聞いていたユニ、フィア、ルセリナとアリシアが固まった。

「え？ なにその反応。」

「エイジ、もしかして今まで何も知らないで生活してたの！？」

「だってまだ異世界から来て一週間だぞ！？」

「ていうか武器作ったり魔法の練習したりした時に、なんの為に使うのか疑問に思わなかったの！？」

「授業でも言っていましたよ？」

「授業は多分寝てた。」

それにあの時は、『異世界チートだぜヒッハー！！』・・・とか
思ってたテンション上がったんだ。」

「「「「・・・」」」」

「・・・正直、すまんかった。」

「はあ、まあいいよ。
エイジらしいしね。」

ユ二は呆れ気味だ。

「そうですね。エイジさんって切れ者っぽいけど、時々抜けてますしね!」

ルセリナは無邪気に心を決る。

「ふふっ、そそっかしいのだな。」

アリシアは微笑ましそうに見ている。

「あるじはアホの子だったのじゃな。」

フィアにいたってはアホ扱いだ。

英司は悲しみのあまり大げさに泣き真似をかました。

「・・・ヒドイやみんなして・・・グスっ」

それを見たアリシアがあわてて慰めに行った。

「!?!? な、泣くなエイジ殿。
ほ、ほーら、よーしよし。」

アリシアのやさしさに全英司が泣いた。

「ウワアアァン、おねえちゃああん！」

「ぐはッ!？」

なにやらアリシアが鼻を抑えて悶えていた。

「それで？」

結局なんでみんな戦う訓練してるの？」

「それはじゃな・・・」

ファイアが語りだした。

「遠い昔、人類は大いに栄え、この地上を支配したのじゃ。」

「そんな壮大な話から始まるの!？」

「いいから聞くのじゃ。」

そして人類は栄華を競い、互いに争った。

あらゆる兵器を開発し、互いに滅ぼし合ったのじゃ。

そして人類は、生物を兵器にする事を始めたのじゃ。恐ろしい事に、人間も含まれていたそうじゃ。

その生物兵器の成れの果てが、今では『魔獣』と呼ばれているのじゃ。

まあそれはさておき、争いは続き、ついには文明が滅んだ。」

「驚愕の展開!？」

「ま、まで！」

魔獣が生物兵器だという話は私も初耳だぞ!？」

・・・た、確かに戦う為に生み出されたとは聞いていたが・・・」

「ボクも初めて聞いたよ!？」

「私は聞いた事があつたような気がしなくてもないような?」

「うむ。」

おそらく時の流れと共に情報が風化したのじゃろう。

話を続けるぞ？

そしてその後、生き残った生物兵器は繁殖を続け、世界は生物兵器と強力な野生動物がはびこる弱肉強食の荒野となった。」

「マジか!？」

「うむ。」

そして生き残った僅かな人類は、かろうじて残った軍事施設やシエルトターの周りに城壁を築き、小さな国を作り、細々と繁栄してきたのじゃ。」

「・・・なんという歴史ドラマ・・・」

「うむ。」

今でも城壁の周りには魔の森が広がり、時々魔獣が、街を襲いに現れるのじゃ。」

「・・・びつくりだぜ・・・」

「うむ。」

今では魔獣も貴重な資源でもあるので、街の外に狩に出ることもあるのじゃ。」

「

「それなんてハンター？」

「うむ。」

しかし魔獣は一体でもとても強大じゃ。

そして本来、制御装置の役割を果たすはずの『女王』なども野生化し、制御は不可能じゃ。

そして群れを作る。

今までは運良く小さな群れしか襲って来なかったが、万が一女王を含むような大群に襲われることがあれば、国が壊滅する可能性が高い。それを防ぐため、また資源を手に入れるため、そして生きるために人々は戦う術を学ぶのじゃ。」

「・・・なるほど・・・ファンタジーかと思ったらSFだったのか・・・」

「今の聞いて感想はそれなのか!？」

「ふっ、ファイアよ、たとえ世界がどうなろうとも、俺のする事は変わらない。」

ただ思うがままに生きるのみだ!

人生楽しく過ごした者勝ちだぞ!？」

「あるじは思うがまますぎると思うのじゃ。」

その時、けたたましく鐘を打ち鳴らす音が街中に響き渡った。

「「「「「!?」「」「」

「今の鐘は!?!」

「噂をすればだ。

魔獣の襲撃だ。

私も行くべきだな。」

アリシアが行こうとする。

「姉さん武器も無いのにどうすんのさ!?!」

あわてて英司が引き止める。

「!　しかし私はっ!」

「代わりに俺が行く。」

「!?!　何を言っている!

そう簡単に魔獣が倒せると思うな!」

「そういう姉さんだって武器無しじゃ駄目だろ?

だからサポートしてくれ。俺はこの世界の事がわからない。

姉さんには武器が無い。

だから教えてくれ。

今回はこの世界の実情を知るチャンスなんだ。」

「・・・むう、時間も無いし仕方がない、行くぞ！」

「おつよ！」

第十七話　今更ながら何故に（後書き）

説明回でしたね。

次話は一応出来ているので、あまり遅くはないです。

ではまた

第十八話　へへっ、あんたも此方の人だったのかい？（前書き）

姉さんのターン！

では

第十八話　へへっ、あんたも此方の人だったのかい？

アリシアと英司は魔獣が来たという場所へ向かって走っていた。

走りながらアリシアが英司に話しかける。

「エイジ殿、ただ楽しく生きる、というのなら、魔獣などほっといて遊んで暮らせば良いのではないのか？
今の立場ならそれも可能だろう。」

しかし英司は笑って答える。

「この先には最大級の冒険が待っているのに、ここで逃げたら楽しく無い。」

その後の人生で、『あの時の俺はカッコ悪かったなあ・・・』とか思いながら生きて行くのはまっぴらだからな。

それよりは『あの時の俺カッコいい！』とか誇りに思えるほうがいい。

俺は楽しくない事はしたくない。

ただ、楽しく生きるだけさ！」

「ふふっ・・・なるほど、それは楽しそうだ。」

「ああ、楽しいよ？

その代わり頭の固い奴や器の小さい奴らには目の敵にされるけどね。
これがなかなかめんどくさいんだ。」

「なに、気にすることはないさ。
そのうちきつと理解してくれる人が現れるよ。」

「・・・姉さんは理解してくれないの？」

「む、その・・・いいな、と思つて・・・
でも実践するには難しいなと・・・
理解した！ 理解したからそんな顔をするな！
ほ、ほら、よーしよし・・・」

「ウワアアアン おねーちゃん！
・・・つてやってる場合じゃなかった！」

「！？ ゲフンゲフン！
そ、そうだったな！
・・・む？ 見えたぞ！あそこだ！」

アリシアが指した先には、崩れた城壁があつた。

そして、その外側からは、何かが暴れているような音と、

「グオオオオオオオ！！」

という咆哮が聞こえてきた。

「なんだ今の!？」

「魔獣の鳴き声だろう。
行くぞ!」

英司は、アリシアの声に従い、崩れた城壁に近寄った。

そして、そこから見えた光景に心を奪われた。

そこに広がっていたのは、ほんの少しの平地と、見渡す限りの密林、遠くで天を突く勢いで聳え立つ巨木と、どこまでも続く蒼い空だった。

そして目の前には三機の四脚ゴーレム、そして一体の魔獣が戦闘を繰り広げていた。

英司は異世界を目の当たりにした。

「……これが……これがこの世界の景色なのか……」

「え、エイジ殿……
異世界を目の当たりにしてショックを受けるのはわかる。」

「う、うむ。」

まあ今回は魔導機兵隊が出ているから出番は無さそうだな。」

「あれは魔導機兵っていうのか・・・」

城壁の外では、四本の足を四方に広げた平たいボディに、重機のよ
うなアーム、剥き出しの武装ラックのようなパーツが載っている。
全高は7メートルほどだろうか。

アームにランスと楯のようなものを装備しているのがおそらく隊長
機だろう。

柄の長いランスを巧みに取り回して、魔獣を翻弄している。

魔獣は、何処と無くサイに似ていた。

トカゲのような鱗、頭と一体化した一本の角、いや、頭がまるで杭
であるようなフォルムだ。

十メートルにせまる少しずんぐりした体格からは想像もつかないよ
うなスピードで突進してくる。

しかし、三機の魔導機兵に翻弄されて攻撃を当てる事が出来ないで
いる。

「あれが我が国が誇る最新兵器さ。」

アリシアがどこか不満そうな顔で呟いた。

「どうしたのさ姉さん。」

そんな不満そうな顔して？」

「・・・そう見えるか？」

「うん。」

なんかこう・・・理想と違う？　みたいな顔？」

「！？

・・・よくわかったな？」

「！？

・・・当たってたのか・・・」

「あてずっぽうだったのか！？

「ごめん。」

でもなんか『むむむウツ』って顔してた。
なんかあったの？」

「・・・はあ・・・」

実はな、私は幼い頃魔獣に襲われたんだ。

もう駄目だ、と思った時、当時の魔導機兵に助けられた。

当時、まだ騎士団は寄せ集めの部隊だった。

その中に、発掘された古代の人型魔導機兵がいたんだ。

私と魔獣の間に颯爽と割り込んだその後ろ姿が今でも目に焼き付いているよ。」

英司はまさかの人型魔導機兵体験談に驚愕していた。

「そ、その魔導機兵は今何処に!？」

「旧型はお払い箱だとさ。」

皇宮のどこかにあるらしい。」

「そうか・・・」

「全く、私はあの人型に乗る、その為に騎士団に入ったというのに・

入ってみればあんなものはオモチャだなんだと言われてな・・・
すまない、つまらん話を聞かせたな。

忘れてくれ。」

「・・・まさか姉さんまでこちら側の人間だったとはな。」

「？ なんの話だ？」

「姉さん、今でも人型に乗りたい？」

「・・・乗れるのであれば、な。」

「しかしもうそんな機会も無いだろうが・・・な。」

「・・・つまらない事言うなよ姉さん。
もう諦めるのか？」

姉さんの事力ツコいいと思ったから“姉さん”と呼ぶ事にしたんだ！
がっかりさせないでくれよ！

あの日の言葉は嘘だったのかよ！？」

「！？

す、すまない、私とした事が・・・
いや私がエイジ殿に出会ったのは今日が初めてのはずだが！？」

「まあそんな事はどうでもいい。

周りに流されて夢を諦めるの？

人生やりたい事やった者勝ちだよ？」

「・・・そうだな・・・私は諦めていたのかもしれん・・・

しかし・・・私はこれから一体どうしたら・・・」

「姉さん、生きている限り次がある。

諦めなければ道は開けるさ。」

「私を・・・私をまだ“姉さん”と呼んでくれるのか？」

「姉さんは諦めないんだろ？」

なら、姉さんが姉さんらしく生きる限り、“姉さん”は“姉さん”さ！」

「う、ううつ・・・エイジどのおっ!!」

感極まったアリシアは、エイジに抱きついた。

「ちょ!？　ね、姉さっ!　いつ!？　よ、鎧が痛い!　痛いって!？」

英司はしばらくアリシアにもみくちゃにされた。

「・・・姉さん、落ち着いた？」

「す、すまないエイジ殿。わ、私としたことが・・・」

「それとね、姉さん。
人型が無いなら・・・作ればいいんだよ。」

「!？」

・・・た、たしかにそうだが・・・」

「姉さん、一緒に人型を作らないか？」

そう言つて英司は手を差しのべた。

「・・・何故・・・何故エイジ殿は今日会ったばかりの私にそこま
でしてくれるのだ？」

「もちろん、楽しいからさ！」

あと人型には俺も興味がある。

それに、姉さんが楽しんでくれれば俺も楽しい。」

「・・・フツ、それは楽しそうだ。」

アリシアは微笑みを浮かべると、英司の手を取った。

第十八話　へへっ、あんたも此方の人だったのかい？（後書き）

魔獣と魔導機兵が空気っすね・・・

ではまた、・・・で、できるかぎり近いうちに・・・

第十九話 ボクっ娘の本気、見せてみるオ!! (前書き)

この筆者更新遅いだろ？

今回は早いほうなんだぜ？これ。

・・・すいません。

前回のあらすじをば。

英司「アハハ」

アリシア「ウフフ」

・・・いっちゃんいっちゃん

魔導機兵・魔獣「「解せぬ。」」

では。

第十九話　ボクっ娘の本気、見せてみるオ！！

「フフツ・・・それは楽しそうだ。」

アリシアは微笑みを浮かべると、英司の手を取った。

「・・・・・・・・・・」

見つめあつて手を握り合う二人。

・・・・にぎにぎ・・・・

先に音上げたのはアリシアだった。

「・・・・え、エイジ殿・・・・そ、その・・・・なんていうか・・・・は、恥ずかしいのだが・・・・」

「姉さんから握ったんじゃないか。」

そう言つて英司が手をはなすと、なぜかアリシアは残念そうな顔をした。

「？　　どうしたの？」

「な、なんでもないぞ？」

「？」

その時、二人の後ろからユニとルセリナが追いかけてきた。

「・・・エイジ！二人とも！

・・・何をしてたの？」

「な！？ な、なんにもしてないぞ！？
手が離れて残念とか思っていないぞ！？」

アリシア大慌て。

「・・・エイジ、キミって人は・・・」

なぜかジト目のユニ。

「？ なんの話？」

話が見えてない英司。

その時、四人の背後で魔獣の断末魔の悲鳴が響き渡った。

「グガアアアアアアアアアア!!」

見ると、魔導機兵が槍で止めを刺したところだった。

「いつの間にか終わってるな・・・」

と英司が呟く。

「まあ珍しく一頭だったからな。
はぐれだったのだろう。」

アリシアもほっとした様子だ。

誰もがこれで一段落だと思ったその時、森が地響きを上げた。

「なんだっ!？」

魔獣の群れが押し寄せ、滅びの音が響く。

最初の一頭は斥候だったのだ。

かつてない規模の大群を従えた魔獣の王が現れる。

英司たちの居た城壁から見えるのは、視界を埋め尽くす魔獣の群れだった。

眼下の魔導機兵は体勢を立て直す名目で早々に城門へ引っ込んでしまった。

「こ、こんな・・・これではもう・・・

この国は終わりだ・・・

せつかくエイジ殿のおかげで新しい生き方を見つけられたと思ったというのに・・・」

「そ・・・そんな・・・

わたしあんまりエイジさんと絡んでないのに・・・

こ、こうなったら、死ぬ前にエイジさんと！・・・」

「ぼ、ボクも・・・」

アリシア、ルセリナ、ユニの三人は、突然の避けられそうもない国家壊滅の危機に、衝撃を隠せずにいる。

「どうやら俺の出番のようだな！」

そんな中、英司一人がテンションを上げる。

「諦めるのはまだ早いぞ？
出来る事をやるうぜ？」

「！？」

・・・そうだな。

私はさっき諦めないと決めたばかりだというのに・・・
ふつ、そうだ、私とて剣が無くとも魔術がある！
私はまだ戦える！」

「ボクにもエイジと作った新しい杖がある！
一人なら厳しいけど、エイジがいるなら！」

「・・・そうですね！
魔術は皇族のたしなみです。
サポートなら！」

それぞれ虚勢ではあるが精神的な復活を遂げる。

「よく言った！

とりあえず姉さんと俺で前衛、リナとユニで援護でいい？」

「異議無し！」

「じゃあとりあえず姉さんには剣をあげよう。」

「エイジ殿、どこにそんな物が？」

「ふつ、行くぞファイア！」

「了解じゃあるじ！」

英司は右手の掌を地面に向け差し出し、そして叫ぶ。

「飛塵鉄砂！」
ひじんてつさ

創剣陣！！
そうけんじん

刹那、風が狂い、渦を巻く。

巻き上げられた砂が、音を立てて擦れ合う。

下を向いた掌の中に砂鉄が集まり、赤熱してその形を変える。

凄まじいマナが凝縮し、ついには金色に輝きだす。

内部では高密度な多重構造が一瞬で作りに出される。

強度に影響を与えないよう配慮しつつ、一気に温度を下げる。

わずか十秒あまりで、英司の掌には漆黒の大剣が握られていた。

「はい、姉さん。」

「・・・もう驚かないぞ。

なんだかエイジ殿を見ていたら、魔獣の群れなど大したことない気がする。」

「ボクもだいぶ前にそう思ったよ・・・
なんで忘れてたんだろ・・・」

「さすがエイジさんです！」

「兵士を出せ！

武器を变形させろ！

作戦を再構築して立ち上がれ！

剣を拾って反撃しろ！

さあ、夜はこれからだ！

ハリー、ハリー、ハリー！ハリー！ハリー！！！」

「しっかりしてエイジ、今は昼だよ！？」

「さあ往くぞ！

悲鳴を上げる・・・

ブタのよう なアッ！！」

「エイジ！？　しっかりしてエイジ！！」

・・・英司も結構テンパってたようだ。

「おつといかん、気合い入れ過ぎた。」

もう魔獣は目前に迫っている。

「ファイア！」

「【デストラクト　ランサー】じゃ！」

英司の手元に長大な対物ライフルが召喚される。

「徹甲散弾だ！

派手に行くぞ？」

「了解じゃ！」

「どかーとりっじ！」

ガシユン！

カートリッジが装填される音が響く。

ライフルと言うよりはキャノンと呼ぶべき口径のバレルが鈍く光っている。

銃床部には斥力場発生術式による衝撃緩和ユニットが搭載されている。

何をするにも大量にマナを消費する贅沢な仕様だ。

正式な名称は、複合魔導加速狙撃砲“デストラクト ランサー”だ。製作した本人が名付けた。

搭載されたマナコンデンサに、膨大なマナを限界まで流し込む。

そして、トリガーを引き絞った。

ドガッツツツッ！！！！！

轟音を立てて閃光が迸る。

銃口から飛び出した散弾はそれぞれが、英司の魔力によるマナとフイアが編み上げた術式によって生み出される圧倒的なエネルギーを纏って駆け抜ける。

通常の散弾ならば、銃口を飛び出した直後に燃え尽きる速度と温度だが、魔導鍛造されたアダマントイト製の散弾は空気摩擦と術式の熱量など物ともせず標的を貫通する。

結果、発射した瞬間に魔獣の第一波の約七割、二百体あまりを吹き飛ばした。

「………は？」

見ていた三人は驚愕している。

ついでに言うと、離れて見ていた兵士や一般人たちも驚愕していた。

「はっはー！」

やってやったぜ！」

「さ、さすがエイジ殿！」

これなら国を救えるかもしれない！」

「いや、今のあと一発しかないんだ。」

「なっ！？ なぜ！？」

「あれは散弾一発一発を丁寧に仕上げないといけないんだ。適当にやるときれいにバラけないし当たる前に燃え尽きるし……というわけ。」

「「「……そんな……」」」

「まあ他にも色々あるし、皆も手伝ってくれるんだろ？
なんとかなるさ！……多分」

「そんな適当な……
まあしょうがないか。」

エイジだもんね。

それじゃあ、ボクの本気、見せてあげるよ！」

そう言っつてユニは杖を構えた。

右手でグリップを握り、左手で柄を握っている。

ユニ監修のもと、英司とフィアが作り上げた杖、
“可変式魔導機械

杖”試作型『フレスベルグ』（命名、英司）だ。

見た目としては、長い柄の先端下部にP90アサルトライフルがくっついているような・・・

と言っべきだろうか。

「ついに“この子”（フレスベルグ）の御披露目だね。」

ユニはベルトに差していた小瓶を抜き取ると、杖の先端に装着した。

「風よ！集いて火種を運べ！」

ユニが詠唱しながらトリガーをひくと、杖に装着された小瓶がはじけ、中身を前に飛ばす。

小瓶に詰まっていたのは、小分けにされた薬品だった。

詠唱により、杖にまとわりついていた風が、それを一瞬で運ぶ。

ガロン・・・ガキユツ！

内部に搭載されたリヴォルバー拳銃のようなシリンダーが回転し、マナカートリッジが装填される。

「燃やせ、燃やせ、悉く焼き尽くせ！

猛り狂う業火の海！！」

フレスベルグを触媒に広がった魔力がマナを制御下に置き、マナは分子に干渉して急激に振動させ、熱量をはね上げる。

カートリッジ内部に凝縮されていたマナを一気に解放することにより、瞬間的な出力をさらに上乘せした。

ドオツツツッ！！！！！

轟音と共に、ユニの正面から放射線状に45°の範囲内にいた魔獣、およそ50体あまりが紅蓮にのまれ、一瞬で灰と化した。

元々は広範囲を炎で覆い、肺を焼いて窒息死させる対生物範囲殲滅攻撃だったのだが、この“フレスベルグ”によって広範囲焼夷殲滅攻撃へと変化したのだ。

「まだまだよ！！！」

しかしユニの攻撃は終わらない。

右手のグリップの根本にあるタブを指先で押しつつ、左手に握っている柄を本体から引き剥がすように起こすと、そのまま先端部を軸に半回転させる。

ガキュン！

接続部が引き込まれ、先端下部に搭載されていた魔導核と接続される。

そう、長い柄は延長用のロングバレルだったのだ。

バレル本体は二重構造により外殻となる柄から独立しており、外部の影響をほとんど受けない。

アダマントタイト製ということもあり、フルスイングで叩きつけても歪み一つできない。

カキヤッ！

柄の石突き、すなわち銃口が解放される。

ユニは銃底を肩に当てて構え直すと、照準を覗きこむ。

ガロン・・・ガキユ！

再びカートリッジが装填される。

「もらった！」

ウンー！！

トリガーが引かれ、銃口から斥力の弾丸が放たれる。

空気中において、魔力による制御下になければ、凝縮したマナは極めて短時間で霧散してしまう。

その為、魔法、魔術においては、おのずと射程距離が決められてくる。

“フレスベルグ”（狙撃形態）は、“純粹な魔力による直接攻撃”を目的とした形態である。

魔力を絞り込み、指向性を持たせ爆発的に展開、発生した斥力により標的を貫通させる。

その為、他の魔力を使った攻撃と比べて圧倒的な射程距離と貫通力を誇る。

副次的な効果として、射線上のマナが同時に駆け抜ける為、ただの貫通ダメージではすまされない。

また、本体内部で発動させた魔術や各種実弾を乗せて撃ち出し、追加ダメージを狙う事も可能だ。

不可視の弾丸が、辛うじて生き残った魔獣の眉間を撃ち抜く。

その魔獣は声も上げずに絶命した。

ガロン、ガロン、ガロン

ガキュ！ガキュ！ガキュ！

ウン！！ウン！！ウン！！

シリンダーとカートリッジの作動音、鈍い射撃音と共に、生き残った魔獣の眉間を撃ち抜いていく。

魔獣の第一波が全滅するまで、さして時間はかからなかった。

第十九話 ボクっ娘の本気、見せてみるオ!! (後書き)

ではまた。

・・・は、はやく更新出来るようにがんばるよ？

・・・ほんとだよ？

第二十話 ウィップ・・・と、呼ぶべきだろうか？（前書き）

非常に遅くて申し訳ありませんでしたーッ！！

恐らくみなさん前の話覚えてないと思うので、前回までのあらすじ。

ユニ「これが今のボクの全力全開！」

ドゴオオオオッ！！

英司「高町式会話術！？」

では。

・・・そういえば告知も無くタイトル二回変えました。
すいません。

第二十話 ウィップ・・・と、呼ぶべきだろうか？

ユニと英司は一通り狙撃で魔獣を片付けた。

「・・・ボクはそろそろきついかも。
・・・少し休ませてもらっていい？」

ユニも少し疲れたようだ。

本来、あれほどの規模の攻撃を一人で行うなどまず不可能であり、この世界の常識からすればかなりの非常識である。

いくらフレスベルグが優秀とはいえ、そんな攻撃を単独でこなしておいて『少し疲れた』で済ませられるのは、ユニが優秀だからに他ならない。

「ああ。第二波が来るまで休んでな。」

「うん。そうさせてもらっね。」

「いや、驚いた。
今日は驚いてばかりだ。
なんだその杖は？」

相変わらず驚いてばかりのアリシア。

「えへへ、ボクとエイジの合作なんだ」

フレスベルグを見つめてニヨニヨしているユニ。

「ず、ずるいです！

エイジさん！わたしにも！わたしにも何か作ってください！！」

「え、エイジ殿！そういえば私の武器を修理改造してくれるという話は！？」

英司に詰め寄るルセリナとアリシア。

「あー・・・まあこれが一通り終わったらな。」

「約束ですよ！？絶対ですよ！？」

「私もだぞエイジ殿！？」

「・・・世の中に絶対などありはしないのだよ。」

「ずるいですエイジさん!？」

「ずるいぞエイジ殿!？」

「言ってみただけだよ？」

「「なにゆえ何故!？」」

などと話しているうちに、第二波が迫って来ていた。

「そいじゃ姉さん、行きますか!」

「うむ!」

城壁から飛び降りる英司とアリシア・・・と、見せかけて、2人も空中を駆け抜ける。

「風の加護!」

「光の翼!」

アリシアは集めた空気のかを足の裏から連続で噴射させて走り、英司は光の翼を展開させて飛んでいた。

やがて、魔獣の目が覗けるほどに近付いた。
様々な種類の魔獣が入り交じった混成部隊のようだ。

「ファイア！」

「『ツヴァイザンバー』！」

英司の右手、ファイアの腕輪が輝き、その手に握られていた長大な対物ライフルが消え、残ったグリップが細長く変形する。
そして次にグリップに現れたのは、幅の広い鐔だった。
続いて左手にも同じように柄と鐔が現れる。

キイイイン！！！！

埋め込まれたクリスタルが唸りを上げる。

「飛塵鉄砂！」

風が巻き起こり、砂鉄を巻き上げる。

巻き上げられた砂鉄は、音を立てて集まり、両手の柄に大剣の刃を形作る。

刃幅20センチ、長さ1メートル50センチはあろうかという大剣だ。

先ほどアリシアに渡した大剣のときのようにマナが凝縮し、刀身が金色に輝きだす。

しかし、一向にその輝きが収まらない。

むしろより一層まばゆく輝きだす。

黄金に輝く双大剣。

その正体は、極限まで密度を高めたマナを込めたアダマントイトだ。本来ならばいくらアダマントイトといえど耐えきれず自壊してしまう。

それを強大な魔力により強引に押し留めているのだ。

ザァッ!!

風を巻いて、まるで翼を開くように両手を左右に開いて引き絞る。

その状態から、一切体幹をぶれさせずに剣を振るう。

魔力・・・斥力による補助があつて初めて出来る芸当である。

正面から迫る魔獣をすれ違いざまに右手の大剣で二枚に下ろす。

甲殻の厚い突進型の魔獣をあつさりと斬り倒す。

魔獣の防御力は、単純な甲殻の物理防御のみではない。

その甲殻は魔導効率の良い魔導素材であり、その構造を常に発生させた斥力により支えている。

さらに外向きの縦圧縮された斥力場を纏う事により、その身に触れる事すら困難である。

それを破るには、斥力場を維持出来ないほど衰弱させるか、その斥力場を上回る斥力、あるいは質量を叩き込むしか無い。

今回の場合、あまりにも強大だった英司の魔力が魔獣の魔力を圧倒的に上回った上に、強化され加速された高熱の大剣の質量と熱量という物理攻撃力が、魔獣の魔力、物理防御力を上回った、当然の結果と言えるだろう。

まるで踊るように金色の双大剣を振るう英司。

その背中を守るように漆黒の大剣を振るうアリシア。

英司に負けず劣らず、卓越した魔力操作で大剣を操り、一撃で効率良く急所を潰して倒していく。

それはまるで、幻想的な英雄譚の一コマのようであった。

しかし英司の無双はこれで終わらない。

刀身をさらに加熱、マナを増加させ、刃をプラズマ化させる。

そのプラズマの刃はまるで生きているかのように蠢き、魔獣を切り刻み始める。

切り刻んだ物質を材料としてプラズマ化させ、刃を延ばす。

プラズマ化した刃を、縦圧縮した内向きの斥力場で包み、形を持たせているのだ。

内向きの斥力場に触れた物質は内部に引き込まれ、その高圧、高熱、高電圧にさらされて瞬時にプラズマと化す。

周囲の空気や攻撃対象を削り取って取り込み、その構成要素としながらその刀身を延ばしていく。

ついには英司が動かなくとも、イメージするだけで長大な刃が縦横無尽に暴れ回り、魔獣をまとめて葬り去っていく。

ザガガガガガッ！！！！

光の帯が戦場を駆け巡り、後に残るのは切り刻まれ焼き払われた魔獣の残骸だけだった。

やがて、第二波の魔獣は全滅した。

役目を終えた光の刀身は、一瞬激しく輝くと、その身をほどいて消えていった。

出番をほとんど英司にとられたアリシアがいじけている。

「え、エイジ殿！　これでは私の出番が無いではないか！？無いではないか！？」

大事な事なので二回言うアリシア。

「ほーら、よーしよしよし！」

某動物王国の主風にわしゃわしゃする英司。

「ちょ！？　え、エイジ殿！？　や、やめ……んっ……」

そう言われて手を止める英司。

……なぜかアリシアは残念そうな顔をしていた。

城壁の上では、ルセリナが英司とアリシアを見つめて落ち込んでいた。

「わたし最近ホント空気です……」

「エイジーっ！」

第三波が来るよーっ！」

遠くを観察していたユニが叫ぶ。

「む！？姉さん、第三波がくるぞ！」

「・・・はっ！？」

一旦城壁まで戻る英司とアリシア。

その時、不気味な笑い声が響いた。

「ふっふっふ・・・ここはわたしに任せてもらおうか！」

「「「！？」」」

その不気味な笑いの正体はルセリナだった。

「皇女が伊達では無いところを見せて殺ります！」

「物騒だなオイ。」

「征きます!!」

「無視か」

何言い出したんだこいつ、という視線の中、ルセリナは祈るように指を組み、右手人差し指の指輪を額に当てる。

そして目を閉じると、静かに唇を開いた。

第二十話 ウィップ・・・と、呼ぶべきだろうか？（後書き）

次回・・・いつになるかわからないけど見捨てないでくると嬉しいです！

では！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5367o/>

異界とあとえーっと・・・～大いなる魂の器～

2011年7月8日01時59分発行